

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

第11集

NAKANO MIHO ISEKI

中野美保遺跡

FUJIGAMORI ISEKI

藤ヶ森遺跡

OGITOTU2 ISEKI

荻杼II遺跡

2001年3月

出雲市教育委員会

序

出雲市は、県下でも埋蔵文化財の密集する地域として知られています。特に、近年の斐川町荒神谷遺跡加茂町加茂岩倉遺跡における大量の青銅器発見は、日本古代史に一大センセーションを巻き起こすとともに、それらの遺跡と密接な関係があると考えられる出雲市内の埋蔵文化財の重要性を再認識させることになりました。

これらの文化財は、貴重な文化遺産として将来にわたって保存、活用していかなければなりません。しかし、近年増加している開発事業に伴い、重要な文化財が少しずつ破壊されているのが現状です。やむを得ず破壊される遺跡については、発掘調査等によって記録保存し、その内容を後世まで伝えていくことが我々の責務であります。

出雲市では、平成元年から出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行し、今までに紹介できなかった埋蔵文化財のいくつかを記録として残してまいりました。今年度は、平成11年度に発掘調査を実施しました中野美保遺跡（中野町）、藤ヶ森遺跡（今市町）、平成9年度に遺物採集をしました荻舟II遺跡（荻舟町）を報告書としてまとめ、ここに第11集として刊行する運びとなりましたが、今後も埋蔵文化財行政推進の一環として、刊行してまいりたいと考えております。

最後に、本書を発刊するにあたり、ご指導、ご協力を賜りました皆様に、心から感謝申し上げます。

平成13年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

例　　言

1. 本書は、これまでに出雲市が実施した発掘調査等のうち、未報告のもの一部についてまとめたものであり、下記の3遺跡について取り扱っている。

中野美保遺跡：出雲市北部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査

藤ヶ森遺跡：出雲市駅周辺地区土地区画整理事業（第10号区画道路建設）に伴う発掘調査

荻杵II遺跡：民間開発に伴う工事中発見遺物採集作業

2. 発掘調査等を行った地番は次のとおりである。

中野美保遺跡：島根県出雲市中野町美保681番地ほか

藤ヶ森遺跡：島根県出雲市今市町961-6番地ほか

荻杵II遺跡：島根県出雲市荻杵町地内

3. 調査等の期間及び組織は次のとおりである。

中野美保遺跡：平成11年（1999）12月13日～平成12年（2000）1月31日

調査指導　守岡　正司（島根県教育庁文化財課主事）

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　大田　茂（文化振興課課長）、川上　稔（同課長補佐）

調査員　坂本　豊治（文化振興課主事）

調査補助員　伊藤めぐみ（文化振興課臨時職員）、糸賀伸文（同臨時職員）

藤ヶ森遺跡：平成11年（1999）8月2日～9月16日

調査指導　守岡　正司（島根県教育庁文化財課主事）

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　大田　茂（文化振興課課長）、川上　稔（同課長補佐）

調査員　藤永　照隆（文化振興課主事）

調査補助員　今岡ひとみ（文化振興課臨時職員）

荻杵II遺跡：平成9年（1997）7月14日

作業主体　出雲市教育委員会

事務局　後藤政司（文化振興課課長）

作業担当者　藤永照隆（文化振興課主事）、石橋弥生（同臨時職員）

4. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SD　溝状遺構　SK　土壙　P　ピット状遺構

5. 本書で使用した捕図の方位は磁北であり、レベルは海拔である。

6. 本書に報告した出土遺物、図面等は出雲市教育委員会において保管している。

7. 本書の編集は藤永が行ったが、執筆については中野美保遺跡を坂本が、藤ヶ森遺跡と荻杵II遺跡を藤永がそれぞれ分担して行った。

目 次

序

例言

目次

中野美保遺跡の調査	1
1 調査に至る経緯	1
2 位置と環境	2
3 調査の概要	2
4 小 結	19
写真図版	20
藤ヶ森遺跡の調査	28
1 位置と環境	28
2 調査に足る経緯	28
3 調査の概要	31
4 小 結	33
写真図版	34
荻舟Ⅱ遺跡出土土器	36
1 位置と環境	36
2 資料発見の経緯	38
3 荻舟Ⅱ遺跡の出土土器	38
4 小 結	41
写真図版	42

8. 調査等にあたっては、開発者及び地元の方々から多大なるご理解、ご協力を賜った。また、荻
杵II遺跡の遺物発見者の方からは、文化財の消失を防ぐ貴重な情報を賜った。記して謝意を表す。
9. 中野美保遺跡の発掘調査及び遺物整理にあたっては、田中義昭（元島根大学法文学部教授）、中
村唯史（島根大学汽水城研究センター客員研究員）、広江耕史、平石充（以上島根県埋蔵文化財調
査センター）からご指導、ご協力賜った。記して謝意を表す。
10. 発掘調査、遺物整理等にあたっては、次の方々に従事していただいた。

中野美保遺跡

発掘調査 吾郷園生子、有田俊夫、奥田利晃、勝部武夫、勝部初子、来間達夫、
高橋ナツエ、原 恒文、森山貞治、佐野静枝、星野勝義

整理作業等 伊藤めぐみ、鬼村奈津子、瀧尻幸平、石川佳子、河井栄子、永田節子

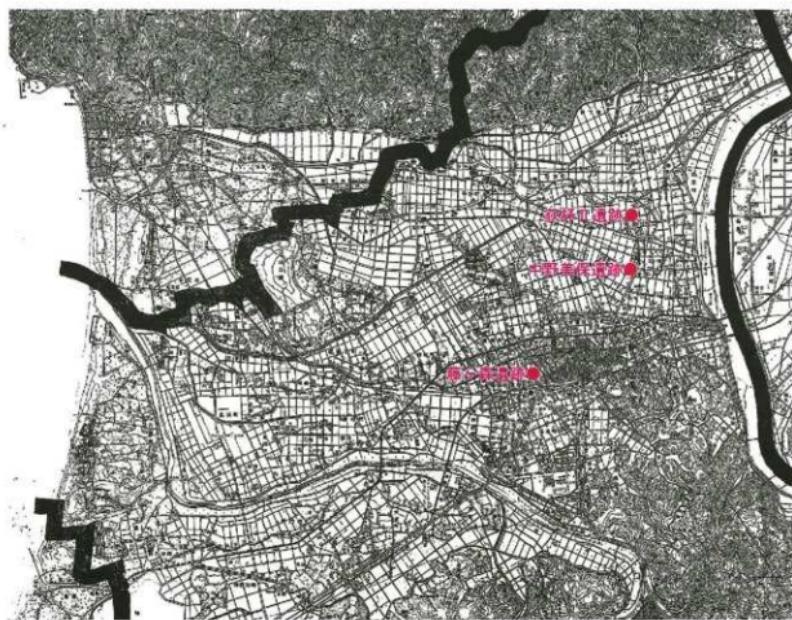
藤ヶ森遺跡

発掘調査 吾郷 栄、板倉セツ子、奥田 広信、片山 修、佐野 静子、
周藤 俊也、高根 正春、長島 節子、藤原 一男

整理作業等 今間ひとみ、遠藤 恵子

荻杵II遺跡

整理作業等 石橋 弥生、今岡ひとみ、永瀬 周子、飯國 陽子、遠藤 恵子



調査地位置図(S=1/75000)

挿図目次

中野美保遺跡

第1図 中野美保遺跡 周辺の遺跡	1
第2図 調査区配置図	3
第3図 試掘1T出土遺物実測図	4
第4図 試掘2T出土遺物実測図	4
第5図 1区2層灰色粘砂土出土遺物実測図	5
第6図 1区3層黒褐色粘質土上層出土遺物実測図	5
第7図 1区3層黒褐色粘質土下層出土遺物実測図	5
第8図 1区4層黒褐色粘砂土出土遺物実測図	6
第9図 中野美保遺跡 2区 遺構図・土層図	8~9
第10図 SK02遺構図	10
第11図 SK02出土遺物実測図	10
第12図 SK03遺構図	11
第13図 SK03出土遺物実測図(1)	11
第14図 SK03出土遺物実測図(2)	12
第15図 2区2層灰色粘砂土出土遺物実測図	13
第16図 2区3層黒褐色粘質土出土遺物実測図	14
第17図 2区4層黒褐色粘砂土(1)出土遺物実測図	16
第18図 2区4層黒褐色粘砂土(2)出土遺物実測図	18

藤ヶ森遺跡

第1図 調査区の位置と周辺の遺跡	28
第2図 遺構配置図	29
第3図 Bライン・土層断面図	30
第4図 1Gr遺構実測図	31
第5図 落ち込み 出土遺物実測図	31
第6図 遺構外遺物出土実測図	32

荻杼Ⅱ遺跡

第1図 掘削地位置図	36
第2図 遺物出土地の位置と周辺の遺跡	37
第3図 採集遺物実測図(1)	39
第4図 採集遺物実測図(2)	40

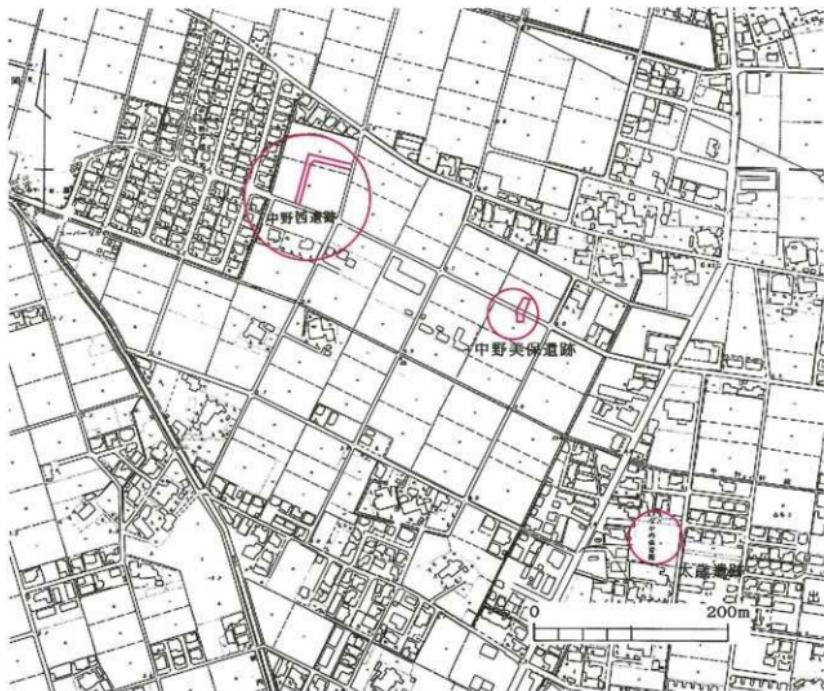
中野美保遺跡の調査

1. 調査に至る経緯

出雲市は現在、市中心部の人口が減少し、周辺地区の人口が増加するドーナツ化現象が生じており、各地で無秩序なスプロール化が進行しつつある。そこで、出雲市中野町・大津町で区画整理事業を行い、良好な市街地の形成を実現し、道路、公園、下水道等の公共施設整備の計画が持ち上がった。

こうした中で、埋蔵文化財との調整が始まったのは平成9年度であった。事業予定地近くには周知の遺跡である太歳遺跡があり、事業予定地内にも埋蔵文化財が存在する可能性があるとし、事前に確認調査を実施することを出雲市に回答した。そして、出雲市は平成11年8月5日付で、出雲市教育委員会に対し、埋蔵文化財の有無について確認調査の依頼している。出雲市教育委員会では平成11年度～12年度にかけて道路予定地に70ヶ所のトレンチによる埋蔵文化財の有無について調査を行った。その結果、5ヶ所のトレンチから遺構・遺物を発見し、そして、出雲市に2遺跡の存在と発掘調査の必要な旨を回答した。

協議の結果、中野美保遺跡を平成11年12月から発掘調査を行うこととなり、中野西遺跡を平成12年7月から行うこととなった。本書は中野美保遺跡の報告である。



第1図 中野美保遺跡 周辺の遺跡

2. 位置と環境

中野美保遺跡は出雲市中野町681番地外に所在し、出雲平野の斐伊川左岸の後背低地に位置する。東には太歳遺跡という周知の遺跡があり、中野町にも遺跡の存在は知られていた。しかし、太歳遺跡の詳細はわかっておらず、平成11年度の中野美保遺跡の調査によってはじめて中野町内の遺跡の調査を行った。また、平成12年度には中野美保遺跡から西へ200mはなれた中野西遺跡の調査も行っている。現在、ほとんど水田であった中野町は区画整理事業によって宅地化が進んできている。

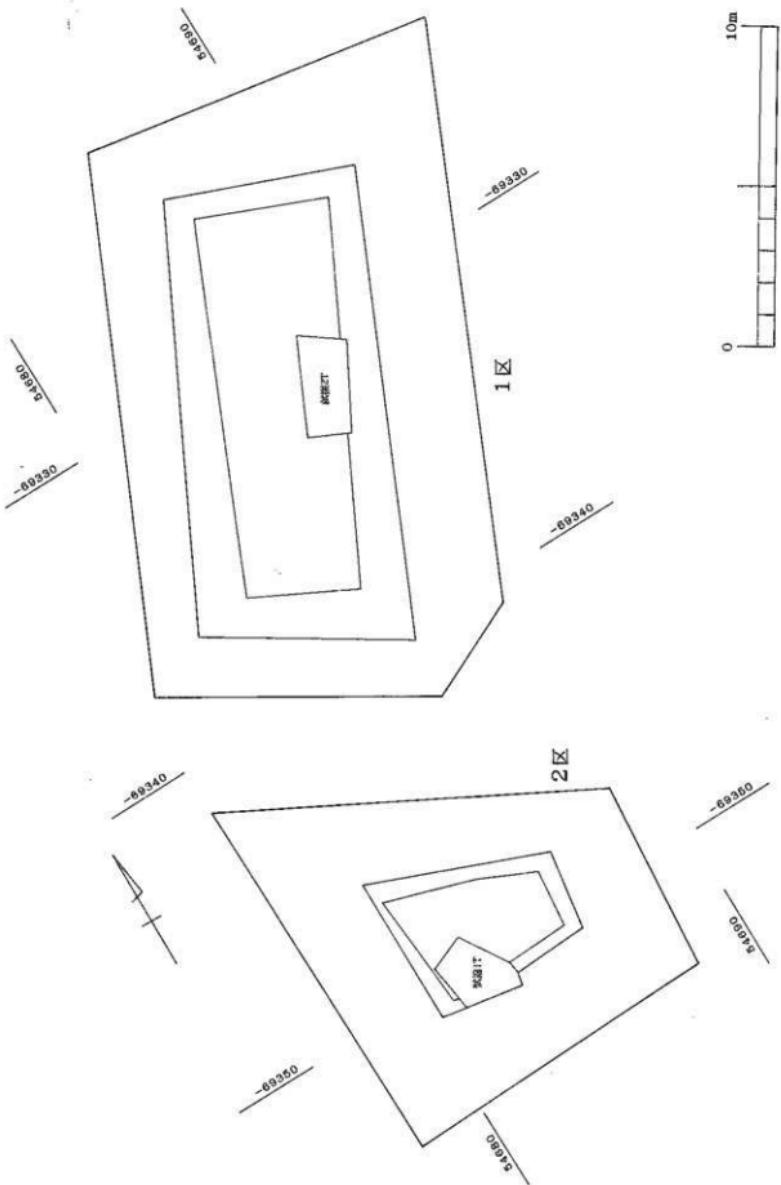
3. 調査の概要

中野美保遺跡の調査区は水道管により2分されていることから、1区と2区の2つにわけて調査を行った。1区は南北15m、東西6mの90m²、2区は南北5m、東西5mの25m²を対象に発掘調査を行った。

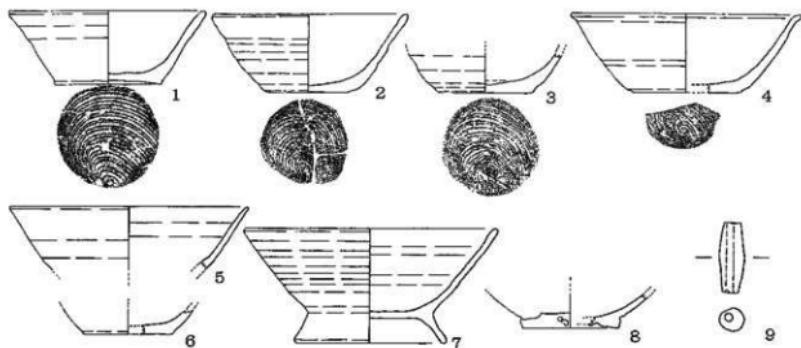
試掘

まず、中野美保遺跡の発見の原因となったトレンチ調査で出土した遺物を紹介する。第3図の試掘1トレンチ出土遺物は、本調査では2区に位置する。1～7は土師器塊である。1はほぼ完存し、口径12.3cm、器高4.7cmを測る。外面にはナデを残し、底部は糸切痕を残す。胎土には2～3mmの赤色粒を多く含む。2は口径12.3cm、器高4.9cmを測る。外面にはナデを、底部には糸切痕を残す。胎土は緻密である。3は底部片で底径6cmを測る。外面にナデ、底部には糸切痕を残し、底部内面中央が若干くぼむ。胎土は2～3mmの長石・石英を多く含む。4は底部から口縁部にかけての破片で全体の1/5残存する。口径約14.4cm、器高4.9cmを測る。口縁部が若干外につまみ出されている他は、2と同じ胎土、色調、特徴である。5は口縁部から体部にかけての破片で、口径約14.8cmを測る。6は底部片で底径約5.4cmを測り、底部には糸切痕を残す。7は高台付塊で、口径約15.8cm、器高7.2cmを測り、約2cmと高く直線的に外方にひらく高台を持つ。口縁部外面には強いナデ跡が残る。胎土は2mm程度の長石・石英を多く含む。器壁は厚く、焼成も堅密でしっかりと作りである。1～7の土師器の時期は11c頃と考えられる。8は緑釉陶器塊の底部片で、底径約6cmを測る。底部は削り出しの蛇の目高台で、高台には圓線状に割りこみが残る。体部外面にはオリーブ灰色の釉が施釉され、底部外面は露胎をなす。時期は9c前半頃と考えられる。9は棒状土錠である。全長4.4cm、幅1.5cm、孔径5mmを測る。色調は暗灰色をなす。1トレンチはちょうど遺構（SK03）にあたり、これらの出土遺物は遺構内出土である。よって、残存状況、一括性の高い遺物である。

第4図の2トレンチは本調査では1区に位置し、遺物包含層を確認した。小片は多数出土しているが、実測可能なものは2点である。1は高坏の口縁部で、口径約21.6cmを測る。口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線が施されている。体部内面にはケズリが見られる。胎土は長石・石英を含み粗雑である。時期は弥生時代後期初頭と考えられる。2は壺あるいは壺の口縁部で、口径約16cmを測り、横ナデが施されている。時期は弥生時代後期後半と考えられる。



第2図 調査区配置図



第3図 試掘1T出土遺物実測図



第4図 試掘2T出土遺物実測図

基本層序・遺構・遺物

1区・2区ともにほぼ同じ基本層序をなす。まず、重機により約1.2m（表土・灰白色砂質土層）を除去して調査を開始した。上層から2層灰色粘土・3層黒褐色粘土質・4層黒褐色粘土と遺物包含層が堆積しており、灰色細粒砂土に達する。特に2層中からの湧水がひどく水処理に悩まされた。

遺構検出面は3層上面（黒色粘土質）、5層上面（灰色細粒砂土）の2面であった。1区では遺構は検出していないが、2区では2基の土坑、1基の井戸を検出している。

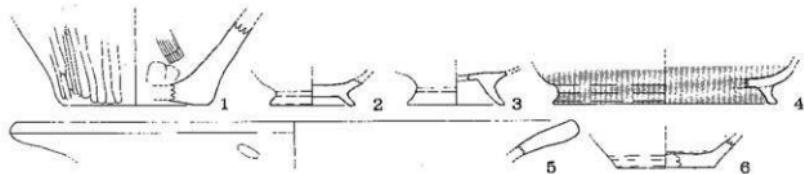
遺物は弥生土器・平安時代須恵器・土師器、土錐、曲物などが出土している。

1区

1区の調査は矢板を打たずに調査を行ったため、土層を実測する直前に壁が崩壊し、地盤が上昇した。したがって、詳細な実測図はない。しかし、遺物については層ごとに取り上げている。3層の黒褐色粘土質は上層と下層に細分している。1区では遺構は確認していない。

・2層灰色粘土質

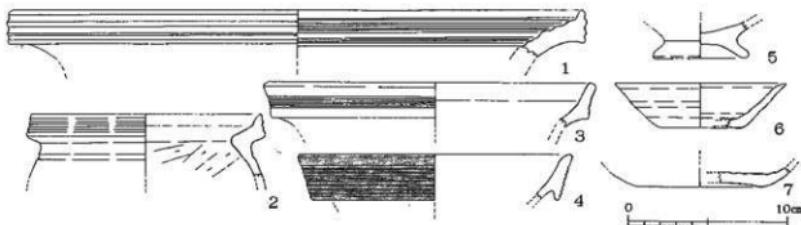
第5図1は壺あるいは甕の底部片で、底径約9cmを測る。器壁は1.3cmと厚く中・大形品と考えられる。外面にはタテミガキ、名面にはハケメ、指頭圧痕が残る。胎土には2~3mmの長石・石英が多く含まれている。時期は弥生中期と考えられる。2・3は低脚壺の脚部である。2は脚径5.3cmを測る。3は脚径約6cmを測る。2・3ともに胎土は精良で、焼成も良好である。時期は弥生後期後半と考えられる。4は土師器の高台付塊の底部で、底径約14cmを測る。内外面ともに赤色顔料が施されていて、胎土は精良で、焼成も良好である。5は土師器の甕の口縁部で口径約34.8cmを測る。胎土は長石を多く含み粗雑である。4・5は8c頃と考えられる。6は土師器Ⅲの底部片で、底径約6.2cmを測る。体部は底部から直線的に立ち上がる。



第5図 1区2層灰色粘砂土出土遺物実測図



第6図 1区3層黒褐色粘質土上層出土遺物実測図



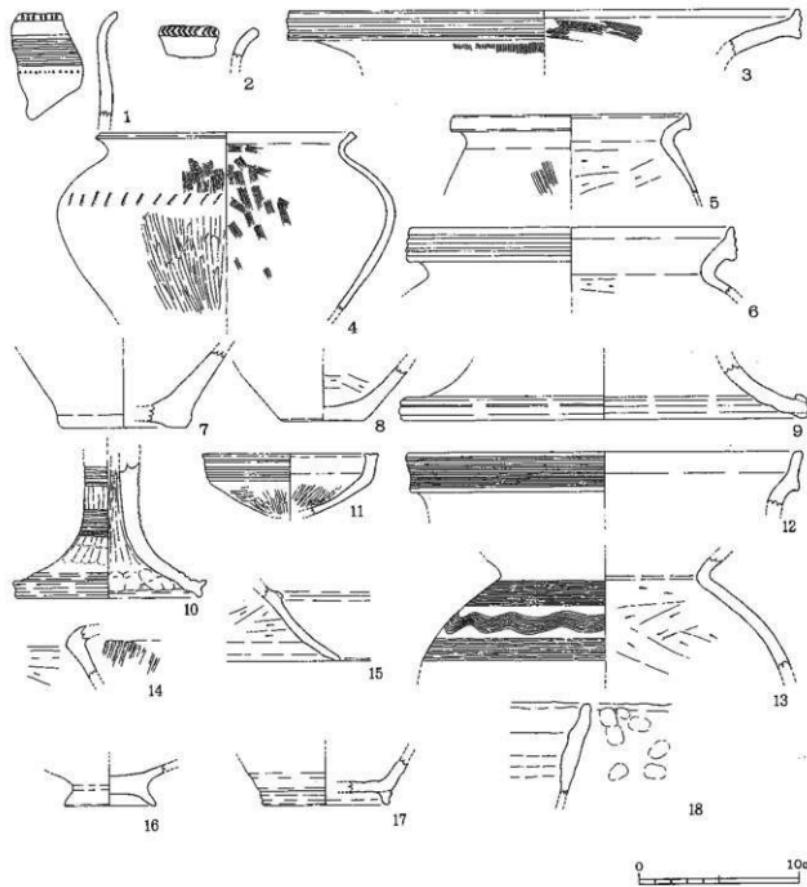
第7図 1区3層黒褐色粘質土下層出土遺物実測図

・3層黒褐色粘質土上層

第6図1は須恵器塊の破片で、口径約10.3cmを測る。内外面ともに丁寧なナデが施され、胎土は精良で、焼成も堅緻である。時期は8cと考えられる。2は須恵器壺の口縁部片で、口縁部が若干外方に開く。外面に段があり、その下には9条以上の櫛描波状文が施されている。胎土は精良で、焼成も堅緻である。

・3層黒褐色粘質土下層

第7図1は広口壺の口縁部片で口径約35.6cmを測る。口縁部は大きく開いて立ち上がり、端部は上下に拡張している。口縁端部には3条の凹線文、内面には6条以上の凹線文が施されている。時期は弥生中期後半と考えられる。2・3は壺の口縁部片である。2は口径14.2cmを測る。口縁端部は上方に拡張し、3条の凹線文が施してあり、胴部上半にも1条の凹線文が施してある。胴部内面にはケズリがみられる。時期は弥生後期初頭と考えられる。3は口径20.8cmを測る。口縁部は複合口縁をなし、外面には擬凹線文が施されている。4は鼓形器台の口縁部片で、口径約17.1cmを測る。口縁部は複合口縁状をなし、下方にも大きく伸びている。口縁部外面には擬凹線文が施され、赤色顔料も施されている。5は低脚壺の脚部で、脚径6cmを測る。胎土は長石・石英を多く含み粗雑である。3～5の時期は弥生後期後半である。6・7は須恵器の塊である。6は口径約10.6cmを測る。7は底部片で底径7.7cmを測り、上げ底をなす。



第8図 1区4層 黒褐色粘砂土 出土遺物実測図

・4層黒褐色粘砂土

第8図1・2は如意形口縁をもつ甕の口縁部片である。1は口唇部に刻目、胴部上半に6条の沈線文、その下に小さい三角形の刻み目を施してある。胎土には2~3mmの長石・石英が含まれている。2は口唇部に羽状文が施されている。胎土は2~3mmの長石・石英が含まれている。1・2の時期は弥生前期末~中期初頭と考えられる。3は広口壺の口縁部で口径約31.6cmを測る。口縁部は頸部から多きく外方に開き、口縁端部は上下に拡張し4条の凹線文を施している。内外面ともにハケメ調整を施している。4~6は屈曲部が逆「く」の字をなす甕の口縁~胴部にかけての破片である。4は口径約16.4cmを測り、胴部上半が大きく張り出し、口縁端部は上方につまみ出されている。外面の胴部上

半はハケメ、ハケメ工具による刻目、胴部下半にはミガキが施されている。内面にはハケメが施され、胴部下半はハケメを施した後ナデ消してある。3・4の時期は弥生中期後半である。5は口径約15cmを測る。口縁端部は上下にやや拡張はあるが凹線文はみられない。全体的に磨滅は著しいが、内面はケズリが施されている。6は口径約10.2cmを測る。口縁端部は上下に大きく拡張し、3条の凹線文が施されている。5・6の時期は弥生後期初頭と考えられる。7・8は甕あるいは壺の底部片である。7は底径約8.4cmを測る。底部は上げ底で端部はつまれ、くびれて立ち上がる。胎土は3~4mmの長石・石英を多く含む。時期は弥生前期と考えられる。8は底径約5cmを測る。底部は平底で直線的に立ち上がる。外面は磨滅、内面はケズリが施されている。時期は弥生後期と考えられる。9~11は高杯の破片である。9は脚部片で脚径約25.6cmを測る。脚端部は上下に拡張し、2条の凹線文が、脚内面にも3条の凹線文が施してある。胎土は1mm程度の長石・石英が多く含まれている。10は脚部で脚径11.5cmを測る。外面にはミガキ調整をした後に、筒部には沈線文、脚端部には凹線文が施してある。内面には指頭圧痕、ケズリ、筒部にはしづり痕が残る。9・10の時期は弥生中期後半と考えられる。11は坪部片で口径約11cmを測る。坪部は接合部から斜めに立ち上がり、口縁部は上方に屈曲する。口縁部外面に4条の凹線文が施され、口縁端部は左右にやや拡張し1条の凹線文が施されている。坪体部は内外面ともにミガキが施され、胎土は精良で焼成も堅敏である。12は壺の口縁部片で口径約24.4cmを測る。口縁部は複合口縁化し、外面に8条の擬凹線文が施されている。11・12の時期は弥生後期前半と考えられる。13・14は甕の屈曲部片である。13は屈曲部径約13cmを測る。胴部上半には沈線文、波状文が施され、内面はケズリが施されている。14は胴部上半外面にタタキ、内面にケズリが施されている。15は鼓形器台の脚部片で、全体的に磨滅しているが、内面にはケズリが施されている。16は低脚坪の脚部で、脚径5.9cmを測る。胎土には2~3mmの赤色粒を含む。13~16の時期は弥生後期後半~古墳前期初頭と考えられる。17は須恵器で高台付碗の底部片である。底径約8cmを測る。色調は灰白色をなし、焼成は軟質である。18は製塙土器の口縁部片である。外面には指頭圧痕が多く残り、内面は強くナデされている。焼成は堅敏である。17・18の時期は8c~9c頃と考えられる。

2区

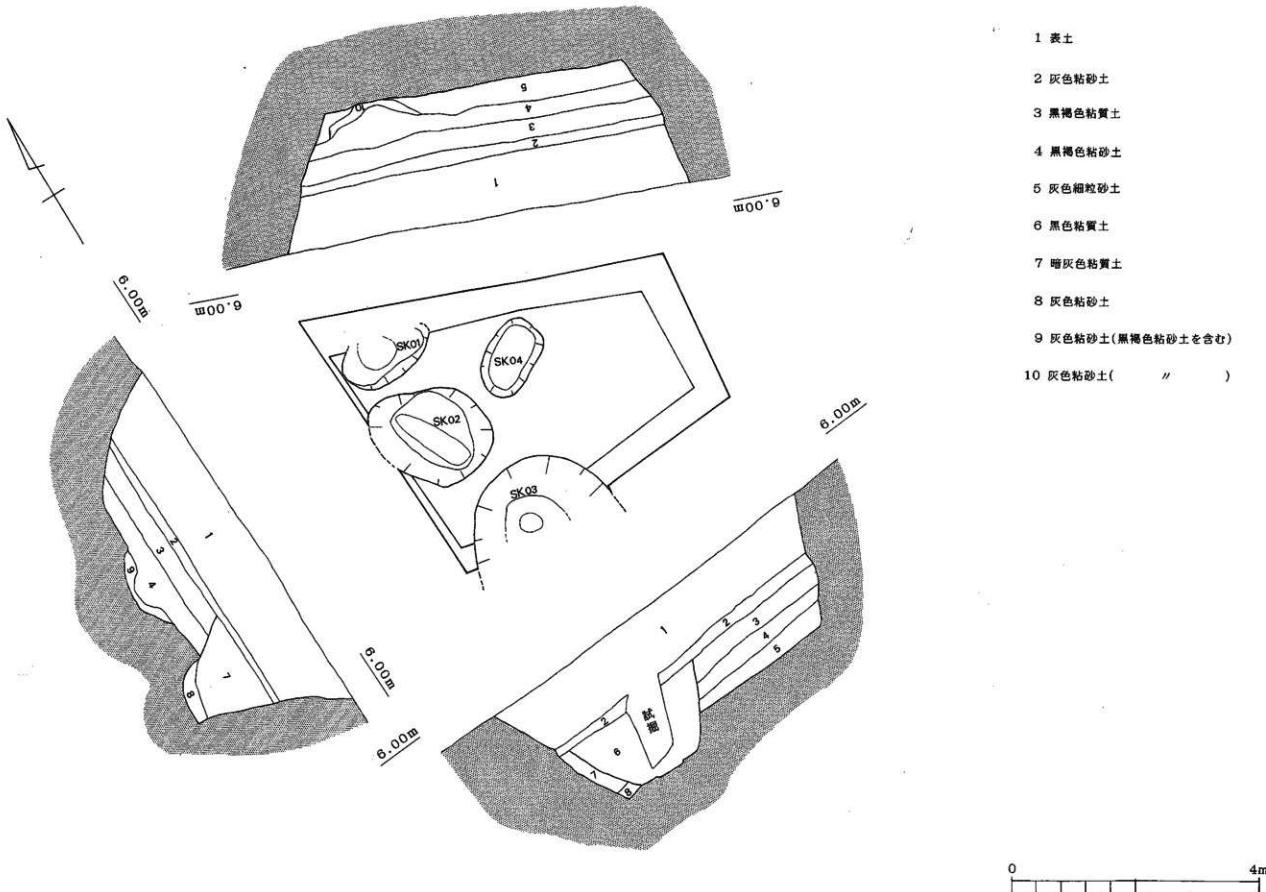
2区の調査は1区で壁の崩落などがおきたため、安全性を考慮し矢板を打って調査を行った。2区では3層上面（SK03）と5層上面（SK01・02・04）の2面で遺構を検出した。また、2~4層から多くの遺物が出土している。

・SK01

SK01は2区の北壁の西位置し、長軸1.5mを測る。遺構の北側は北壁にかかっているため、全体は検出していないが楕円形をなすと考えられる。埋土は4層の黒褐色粘砂土が流れ込んだ状況であった。遺物は弥生土器と思われる小片が出土しているが、実測は不可能で詳細な時期も不明である。

・SK04

SK04は2区の中央北よりに位置し、長軸1.32m、短軸0.78mを測る楕円形をなす。埋土は4層の黒褐色粘砂土が流れ込んだ状況であった。



第9図 中野美保遺跡 2区 遺構図・土層図

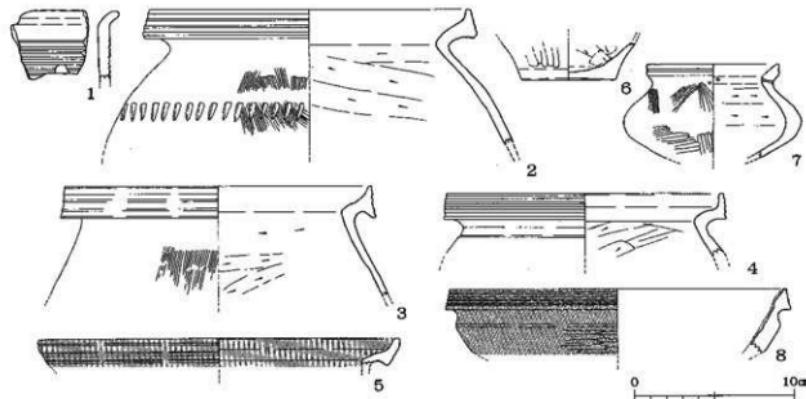


第10図 SKO 2 遺構図

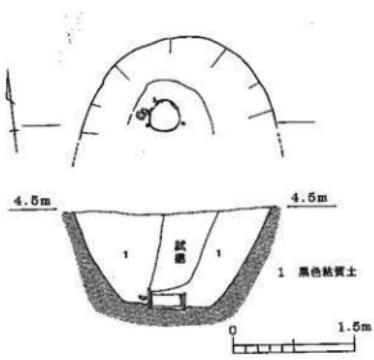
・SKO 2 (第10図)

SKO 2 は2区の中央西よりに位置し、長軸2m、短軸1.56mを測る橢円形をなす。埋土は1層に黒褐色粘砂土、2層は灰色粘砂土に黒褐色粘砂土がブロック状に含まれている。第11図1は甕の口縁部で如意形口縁をなす。胴部上半に7条以上の櫛描沈線文が施されている。胎土は長石・石英を多く含み、色調は灰白色をなす。時期は弥生前末期～中期初頭と考えられる。2～5は甕の口縁部で、屈曲部が逆「く」の字をなす。2は口径約20cmを測る。口縁端部は上方に拡張し、3条の凹線文が施されている。胴部上半にはハケ

メで調整したあと、刻目を施している。胴部内面はケズリが施されている。3は口径約19.8cmを測る。口縁端部は上下に拡張し、4条の凹線文が施されている。胴部外表面はハケメ、内面にはケズリが施されている。4は口径約17.2cmを測る。口縁端部は上方に拡張し4条の凹線文が施されている。屈曲部外表面はナデにより強い段ができる。胴部内面はケズリが施されている。5は口径約22.4cmを測る。口縁端部は上方に拡張し、5条の凹線文が施されている。器面には赤色顔料が施されている。6は甕の底部で、底径約6cmを測る。底部はやや上げ底をなし、外反しながら立ち上がる。外面にはミガキ、内面にハケメが施されている。7は小形の鉢で口径8.2cm、最大径11cmを測る。胴部中央には最大径をもち、口縁端部に1条の凹線文、屈曲部に小円孔が穿たれている。胴部上半外表面にはハケメにより山形文が、胴部下半にはミガキが施されている。内面はケズリが施されている。8は高杯の口縁部で口径約21cmを測る。口縁端部は上下にやや拡張し4条の凹線文が施され、口縁下は強くナデられ段になっている。坏部外表面はミガキ、赤色顔料が施され、内面は器面が剥離している。2～8の時期は弥生後期初頭で1は流れ込み遺物と考えられ、SKO 2 の時期は後期初頭と考えられる。



第11図 SKO 2 出土遺物実測図



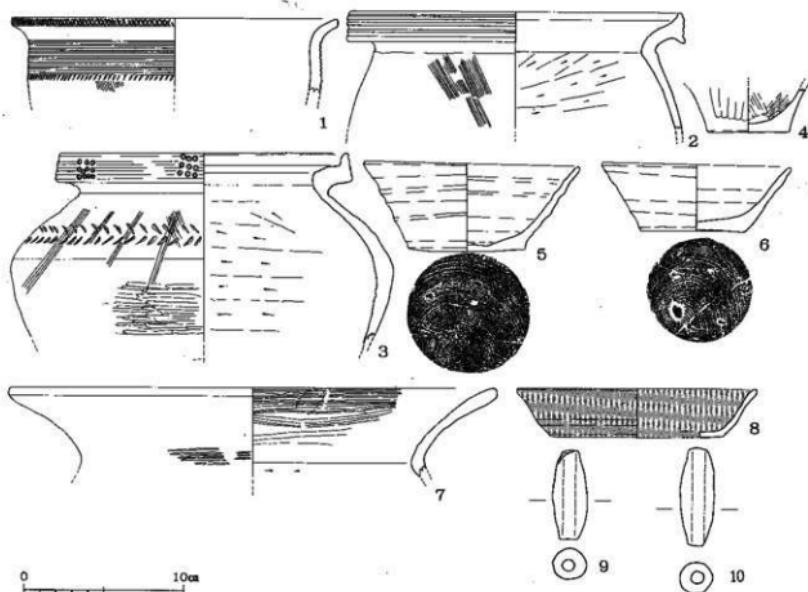
第12図 SKO 3 遺構図

石・石英を含む。時期は弥生前期末と考えられる。2・3は甕の口縁部・胴部上半にかけての破片である。2は口径約21cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、4条の凹線文が施されている。屈曲部外面は強くナデられ、胴部上半はハケメ、内面はケズリが施されている。3は口径17.8cmを測り、胴部上半で最大径24cmをなす。口縁端部は上方に拡張され4条の凹線文が施されている。その後に8~13個

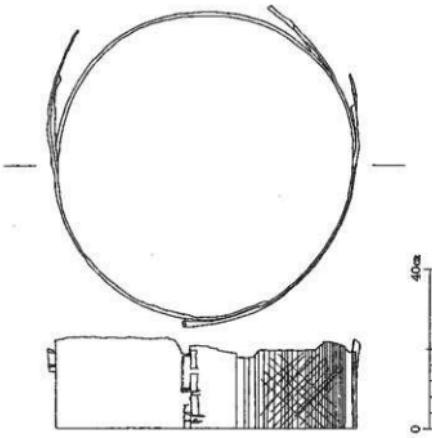
・SKO 3 (第12図)

SKO 3は2区の南西に位置し、調査区に遺構の約半分がかかっている。東西約2.5m、深さ1.2mを測る円形あるいは橢円形の土坑である。試掘調査で重機によりその中心は掘られている。そのため、遺構に伴う遺物の多くは試掘1トレンチから出土している。

遺構の底から木製の曲物が出土したことから、SKO 3は井戸と考えられる。第13図1は如意形口縁をもつ甕の口縁部片で、口径約20.4cmを測る。口唇部には斜格子文、体部には9条のヘラ描沈線文、その下には刻目を施している。胎土は2~3mmの長



第13図 SKO 3 出土遺物実測図 (1)



第14図 SKO3出土遺物実測図(2)

径7.3cmを測る。6は口径約11.8cm、底径6.5cmを測る。5・6ともに外面にはナデあとが強く残り、底部には糸切痕が残っている。胎土は精良で、焼成も良好である。時期は11c頃と考えられる。7は甕の口縁部片で、口径約30.4cmを測る。口縁部は5.5cmと長く、屈曲部から緩やかに外反している。口縁部外面には荒いハケメ、屈曲部外面にはタタキ、内面にはケズリが施されている。胎土には2～3mmの長石、石英、赤色粒が多く含まれている。8は皿の破片で、口径15cmを測る。全体的に強くナデられ、赤色顔料が塗られている。9・10は棒状土錐である。9は全長5.5cm、最大径2.1cm、孔径7mmを測る。10は全長6.1cm、最大径2.1cm、孔径7mmを測る。

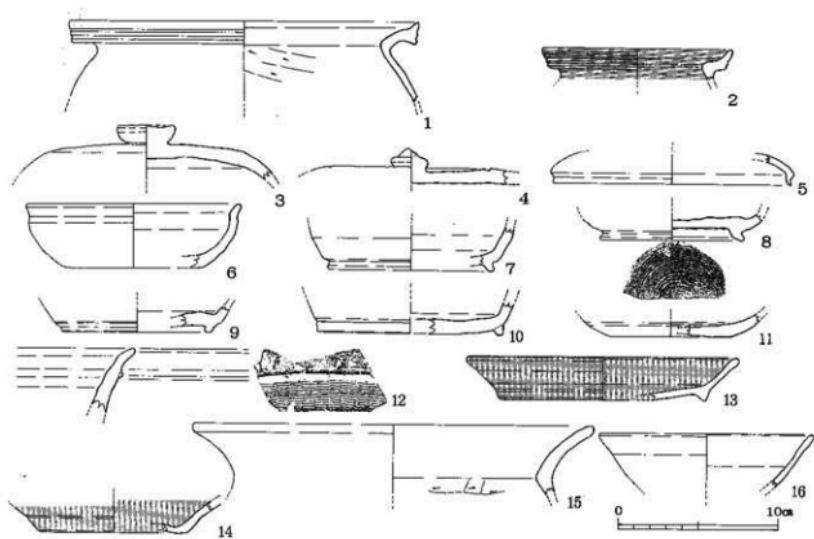
第14図はSKO3の中央最深部から出土した円形曲物である。径37.3cm、側板の高さ約11cmを測る。

SKO3の時期は出土状況などから5・6が遺構に伴う遺物と考えられる。また、試掘1T出土遺物の多くも遺構に伴うものと考え、SKO3の時期は11c頃と考えられる。

・2層灰色粘砂土

第15図1・2は弥生土器の甕の口縁部片である。1は口径約21.8cmを測る。口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施されている。胸部外面は磨滅し、内面はケズリが施されている。時期は弥生後期初頭である。2は口径約11.8cmを測る小形の甕である。口縁端部は複合口縁化し、外面に4条の擬凹線文が施されている。器面上には赤色顔料が施され、胸部内面はケズリである。時期は弥生後期中期である。3～12は須恵器で3～5は蓋である。3は天井部に擬宝珠状のつまみをもち、回転ナデが施されている。4は天井部に宝珠状のつまみをもち、外面にカキ目調整が施されている。天井部と口縁部の境に1条の沈線文が施されている。5は口縁部片で、口径約14.8cmを測る。口縁端部は外反しながら垂れ下がる。6～11は碗である。6は口径約13.3cmを測り、口縁端部はくびれて立ち上がる。

の竹管文が8方向に施されている。胸部上半には羽状文、ハケメが、下半にはミガキが施されている。内面はケズリが施されている。胎土は精良で焼成も堅緻である。2・3の時期は弥生後期前半と考えられる。4は甕の底部片で底径約5.0cmを測り、平底をなす。底部から外反しながら立ち上がり、胸部の器壁は3mmと薄い。外面はミガキ、内面はケズリが施されている。胎土は精良で、焼成も堅緻である。時期は弥生中期後半～後期初頭と考えられる。5～8は土師器である。5・6は塊で、曲物の西側に2つ並んだ状況で出土していた。5は口径約13.6cm、底

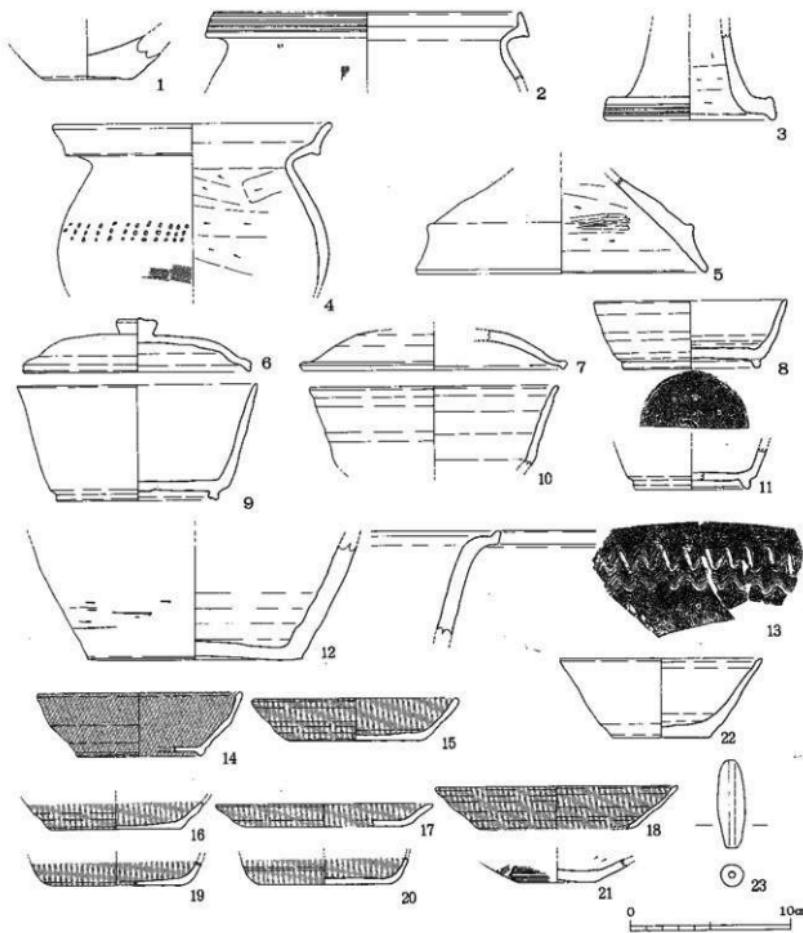


第15図、2区2層灰色粘砂土出土遺物実測図

内外面ともにナデ調整が施されている。7～8は高台付塊である。7は底径約10.3cmを測る。高台は「ハ」の字状に外側に向けて付けてある。内外面ともに丁寧なナデが施してある。8は底径約9cmを測る。高台は「ハ」の字状に外側に向けて付けてある。底部には糸切痕が残る。9は底径約9.3cmを測り、丁寧なナデが施されている。10は底径11.4cmを測り、丁寧なナデ調整が施されている。焼成も堅敏で、胎土も精良である。11は底径約7.4cmを測り、高台は付いていない。内外面ともにナデが施されている。12は壺の口縁部片で、外方に大きく開いて立ち上がる。口縁部外面に1条の突帯が巡らされ、その下に10条の櫛描波状文が施されている。焼成は堅敏で、胎土も精良である。器面には自然釉が付着している。13～16は土師器である。13は浅い高台付塊である。口径約16.6cmを測る。底部は中央が垂れ下がり、口縁部は大きく開き、丸くおさめられている。内外面に赤色顔料が施されている。14は塊の底部片で底径約9cmを測り、内外面には赤色顔料が施されている。15は壺の口縁部片で口径約25cmを測り、屈曲部から口縁部が長い。口縁部はナデ、胴部内面はケズリが施されてある。胎土は2～3mmの赤色粒を多く含む。3～15の時期は8c～9cと考えられる。16は壺の口縁部片で口径約13.2cmを測り、内外面ともに丁寧なナデが施されている。時期は11c頃と考えられる。

・3層黒褐色粘質土

第16図1～5は弥生土器である。1は壺の底部で底径5.5cmを測る。底部はやや上げ底で、直線的に開いて立ち上がる。器壁は1.8cmと厚く、胎土には3～4mmの長石・石英が多く混ざっている。時期は弥生前期末～中期と考えられる。2は壺の口縁部片で口径約19.2cmを測る。口縁端部は斜め上方に拡張され、4条の凹線文が施されている。胴部外面はハケメが施され、内面は磨滅が著しい。3は



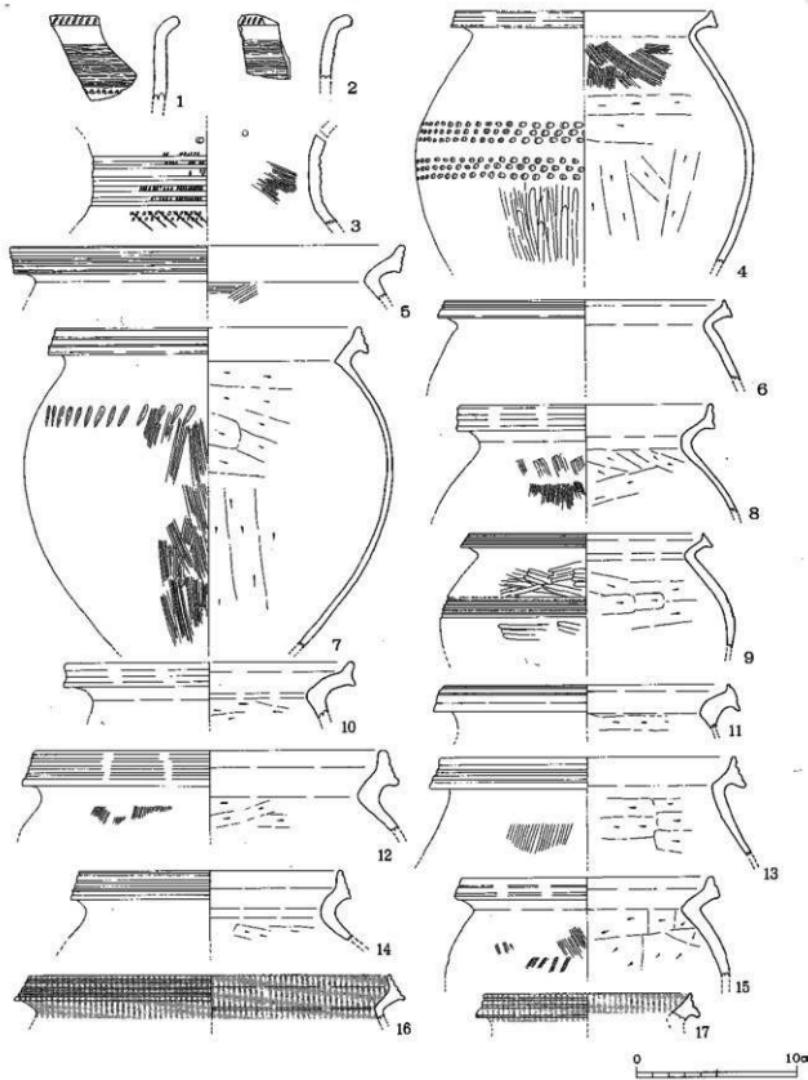
第16図 2区3層黒褐色粘質土出土遺物実測図

高坏の脚部片で脚径約10.8cmを測り、脚端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施されている。器面は全体的に磨滅しているが、内面にケズリが確認できる。色調は灰黄色をなす。2・3の時期は弥生後期初頭と考えられる。4は甕の口縁部片で口径約17.4cmを測る。口縁部は複合口縁化し、口縁端部は丸くおさめられている。口縁部外面はナデが施され、胴部上半には3個1単位の刺突文が施されている。内面はケズリである。5は蓋の口縁部片あるいは器台の受け部である。口径約18cmを測り、口縁部は複合口縁化し端部は丸い。内面はほぼ直線的に作られている。外面は磨滅が著しいが、内面はケ

ズリを施したあと、部分的にミガキが施してある。4・5の時期は弥生後期後半と考えられる。6～13は須恵器片で、6・7は蓋の口縁部片である。6は口径約14.2cmを測る。天井部には擬宝珠状のつまみをもち、口縁端部は外反しながら垂れ下がる。7は口径約16.2cmを測り、口縁端部は若干垂れ下る。8～11は高台付塊である。8は口径約8.4cmを測り、底部には糸切痕が残る。全体に丁寧なナデが施されている。胎土は精良で、焼成も堅緻で丁寧な作りである。9はほぼ完形で口径約15cmを測り、器高は7.2cmと高い。底部にはヘラ切り痕が残る。全体にナデが施されている。10は口縁部片で口径約15.4cmを測り、全面にナデが施されている。11は底径約7.0cmを測る。12は壺あるいは甕の底部片で底径約13.5cmを測り、器壁は1cmと厚い。底部はやや上げ底をなす。外面にはケズリが、内面には強いナデ跡が残る。13は大甕の口縁部片で、口縁端部は上方に拡張されている。全体にナデが施され、外面には7条1単位の櫛描波状文が2段巡る。6～13の時期は8c頃と考えられる。14～22は土師器片である。14は高台付塊で、口径約12.7cm、器高4cmを測る。体部中央で屈曲し、口縁端部は内側に膨らんでいる。全面にナデが施されている。15～21は塊である。15は口径13cmを測り、器高は2.7cmと浅い。全面にナデが施されている。16は底部片で底径約8cmを測る。17は口縁部片で口径約13.6cmを測り、器高は1.4cmと浅い。底部から口縁部が大きく開いて立ち上がる。18は口縁部片で口径約15cm、器高2.7cmを測る。外面に強いナデ跡が残っている。19は底部片で底径8.2cmを測る。20は底部片で底径約8cmを測る。14～20は器壁が薄く、全面に赤色顔料が施されている。時期は8c～9c頃と考えられる。21は底部片で底径約4.8cmを測り、若干上げ底をなす。外面はハケメ、内面はケズリが施されている。外面には黒斑がみられる。22は塊で口径約13.4cmを測り、底部から直線的に開いて立ち上がる。底部には糸切痕が残る。時期は11c頃と考えられる。23は棒状土錐で、全長5.5cm、最大径1.7cm、孔径4mmを測る。

・4層黒褐色粘砂土

第17図は弥生土器である。1・2は甕の口縁部片で如意形口縁をなす。1は口唇部に刻目が斜めに刻まれている。胴上部に13条の櫛描沈線文を施し、その下に三角形の刺突文が巡っている。2は口唇部に刻目が施され、胴上部に9条以上の櫛描沈線文が施されている。1・2の時期は前期末～中期初頭と考えられる。3は壺の頸部片で最大径8.2cmを測る。頸部は筒状をなし、5条の凹線文が巡らされ、その上に3段の刻目が施されている。頸部と胴部の境には3段の刺突文が施された後に、刻目が施されている。頸部と口縁部の境には長径4mmの円孔が穿れている。内面はハケメが施されている。時期は弥生中期後半と考えられる。4～17は甕の口縁部片である。4は口径約16cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線文が施されている。胴部上半には3列1単位の刺突文が2段巡らされている。胴部下半にはミガキが施され、内面は胴部上半にハケメ、下半はケズリが施されている。5は口径約24.5cmを測り、口縁端部は上方に拡張され、口縁端部に4条の深い凹線文が施されている。胴部内面はハケメが施されている。6は口径約17.4cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施されている。調整は内外面ともにナデである。4～6は内面ケズリが屈曲部にまでいたっていない。7は口径約19cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、3条の凹線文が巡らされている。外面はハケメが施された後に、胴上部に刻目が施されている。内面はケズリが施されている。8は口径約16cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の深い凹線文が施されている。外面胴部はハケメ、内面

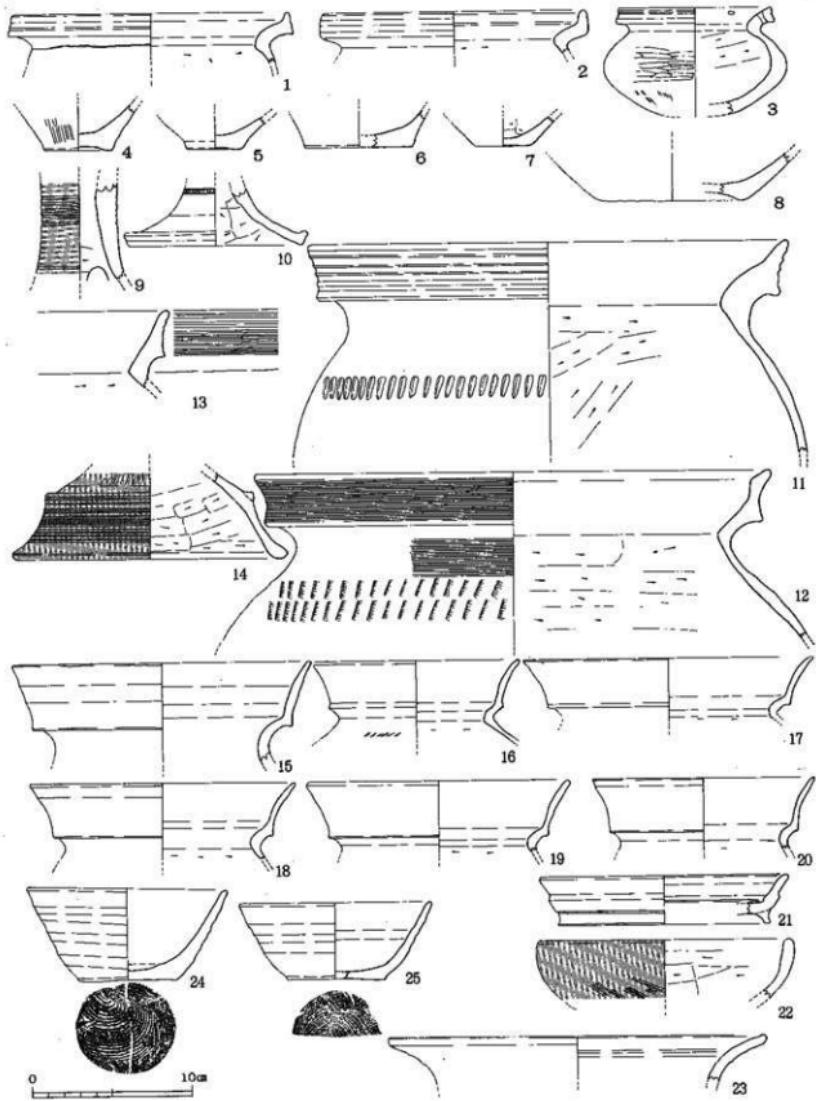


第17図 2区4層黒褐色粘砂土(1)出土遺物実測図

にはケズリが施されている。9は甌あるいは鉢で、口径約14.6cmを測る。口縁端部は上下に拡張され、3条の浅い凹線文が施されている。胴部は丁寧な横ミガキの後に、胴部上半に5条の凹線文が施

されている。灰黄色をなす。10は口径約17.8cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、1条あるいは2条の深い凹線文が施されている。器壁は厚く、胴部内面はケズリが施されている。暗灰色をなし、3mm以下の大石・石英を多く含む。11は口径約17.8cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、5条の浅い凹線文が施されている。口縁部の器壁は厚いが、胴部は内面ケズリにより薄くなっている。12は口径約21.6cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、4条の凹線文が施されている。口縁部の器壁は厚いが、胴部は内面ケズリにより薄くなっている。外面はハケメ調整である。13は口径約18.2cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、3条の凹線文が施されている。胴部外面はハケメ、内面はケズリが施されている。14は口径約16.4cmを測り、口縁端部は斜め上方に拡張され、4条の凹線文が施されている。屈曲部は明瞭な稜線ではなく丸い。胴部内面はケズリが施されている。15は口径約15.7cmを測り、口縁端部は上方に拡張され、2条の凹線文が施されている。胴部外面はハケメを施した後、ハケメ工具による刻目を施している。内面はケズリである。16は口径約23.4cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、4条の凹線文が施されている。全面に赤色顔料が施されている。17は口径約12.4cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施されている。全面に赤色顔料が施されている。4～17の時期は弥生中期後半～後期初頭と考えられる。

第18図1～20は甕の口縁部片である。1・2は甕の口縁部片である。1は口径約17.2cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施されている。屈曲部外面には接合痕が残る。内面はケズリである。2は口径約16.2cmを測り、口縁端部は上方に拡張され、3条の浅い凹線文が施されている。胴部内面はケズリが施されている。3は小形の鉢である。口径約9.4cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、3条の浅い凹線文が施されている。口縁部には直径4mmの円孔が穿かれている。胴部外面にはミガキ、内面にはケズリが施されている。1～3の時期は弥生中期末～後期初頭と考えられる。4～8は甕の底部片である。4は底径約4.4cmを測り、上げ底をなし、くびれて立ち上がる。5は底径3.4cmを測り、やや上げ底をなし、くびれて立ち上がる。6は底径約6.6cmを測り、平底をなし、若干くびれて立ち上がる。7は底径3.1cmを測り、平底をなし、直線的に開き立ち上がる。8は底径約8.9cmを測り、上げ底をなし、直線的に開き立ち上がる。9・10は高壺の脚部片である。9は外面に沈線文が巡らされ、赤色顔料が施されている。内面はケズリ、指頭圧痕が残る。10は脚径10.8cmを測り、脚端部は上方に拡張され、1条の凹線文が施される。内面はケズリである。9・10の時期は弥生中期末～後期初頭と考えられる。11～13は大形の甕の口縁部片である。11は口径約30cmを測り、口縁部は複合口縁化し、4条の凹線文が施されている。胴部上半外面に刻目、内面はケズリが施されている。12は口径約32.2cmを測り、口縁部は複合口縁化し、擬凹線文が施されている。擬凹線文は屈曲部にもみられ、その下にハケメ工具による刻目が2段設されている。内面はケズリが施されている。13は口縁部が複合口縁化され、擬凹線文が施されている。胴部内面はケズリである。14は器台の受部で、脚径約17.2cmを測り、外面には擬凹線文、赤色顔料が施されている。内面はケズリである。11～14の時期は弥生後期中葉と考えられる。15は複合口縁壺の口縁部片で口径約18.6cmを測る。口縁端部は先細りである。16～20は複合口縁化した甕の口縁部片である。口縁端部は先細りである。15～20の時期は弥生後期終末と考えられる。21は須恵器の高台付壺で、口径約13.2cmを測る。内外面ともに強いナデが施されている。22は土師器壺の口縁部片で口径約15.2cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、口縁



第18図 2区4層黒褐色粘砂土(2)出土遺物実測図

端部は丸くおさめられている。外面はハケメ、赤色顔料が施されている。内面はケズリである。22は土師器塊の口縁部片で、口径約15.9cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめられ

ている。外面はハケメ、赤色顔料が、内面はケズリが施されている。23は土師器甕の口縁部片で口径34cmを測り、口縁部は大きく開く。21～23の時期は8c～9cと考えられる。24・25は土師器の塊である。24は口径約12.5cm、器高6cmを測る。外面は強いナデ跡を残し、底部は糸切痕が残る。25は口径約12cm、器高4.8cmを測る。外面は強いナデ跡を残し、底部は糸切痕が残る。24・25の時期は11c頃と考えられる。

4. 小 結

中野美保遺跡は出雲市の北部第二区画整理事業に伴って、新発見遺跡として調査を行った。また、中野町内での発掘調査も初めてであった。調査の結果、1区より2区で多くの遺物、遺構が確認されている。遺物・遺構の出土状況から調査区は遺跡の北端で、遺跡の本体は2区の南であることが考えられる。遺跡の性格は、遺構・遺物から集落遺跡と考えられる。遺跡の時代は弥生前末期～中期初頭、中期末～後期終末、8c～9c、11cの大きく4つの時期に人々が生活していたことがわかる。

・ I期（弥生前末期～中期初頭）

1区及び2区から量は少ないが遠賀川系土器の甕が出土していることから、この地域に前期末から集落が営まれてことが窺える。

・ II（弥生中期末～後期終末）

調査区からは中期中葉の遺物の出土はなく、若干の時間の隔たりがあり、当遺跡は生活の場所になっていたいなかったと考えられる。後期初頭にはSKO2が築かれる。中期末～後期初頭の遺物が特に多く出土していることから、この時期が当遺跡の最盛期であることがわかる。

・ III期（8c～9c）

調査区からは古墳時代の遺物は全く出土していない。当該期遺物の中には綠釉陶器の塊、赤く塗られた土師器塊など、かなりの勢力をもった人が当遺跡で生活していたことが窺える。

・ IV期（11c）

SKO3が築かれた時期で、完形に近い土師器の塊が多く出土している。

中野美保遺跡の調査は115m²というごく少ない面積の調査であったが、多くの貴重な遺物を得ることができた。また、当遺跡から西へ200mはなれた中野西遺跡からは、当遺跡から出土していない古墳時代や鎌倉時代の遺物が多く出土している。これらを深く検討すると、当時の人々の移動がわかつてくる。

中野町内の遺跡はまだその一端が見え始めた時であり、今後の調査研究で、古代の人々の生活について少しずつ解明できるであろう。

【参考文献】

- 正岡睦夫・松本岩雄編1992『弥生土器の様式と編年』山陰・山陽編 日耳社
広江耕史1992『島根県における中世土器』『松江考古』第8号 松江考古学談話会



中野美保遺跡調査前状況
(北より)



中野美保遺跡調査前状況
(北西より)



1区西壁土層堆積状況(東より)



1区完掘状況(南より)



2区遺構検出状況(南より)



2区北壁土層堆積状況(東より)



SKO 1 土層堆積状況(南より)



SKO 2 土器出土状況



SKO 2 完掘状況



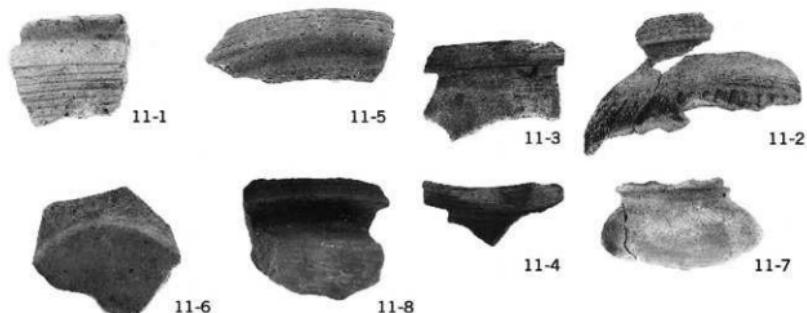
SKO 3 完掘状況(北より)



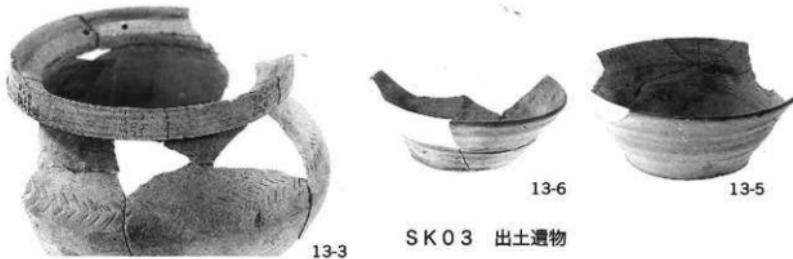
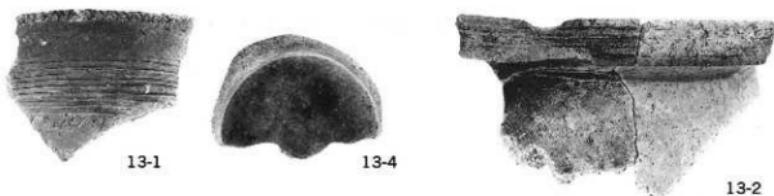
SKO 3 遺物出土状況(北より)



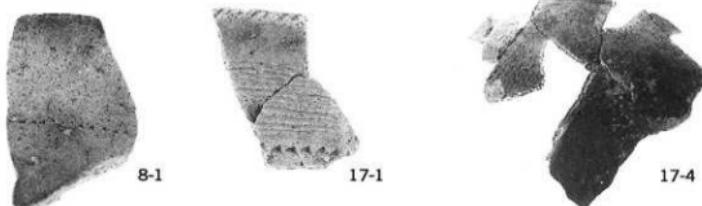
2区完掘状況(東より)



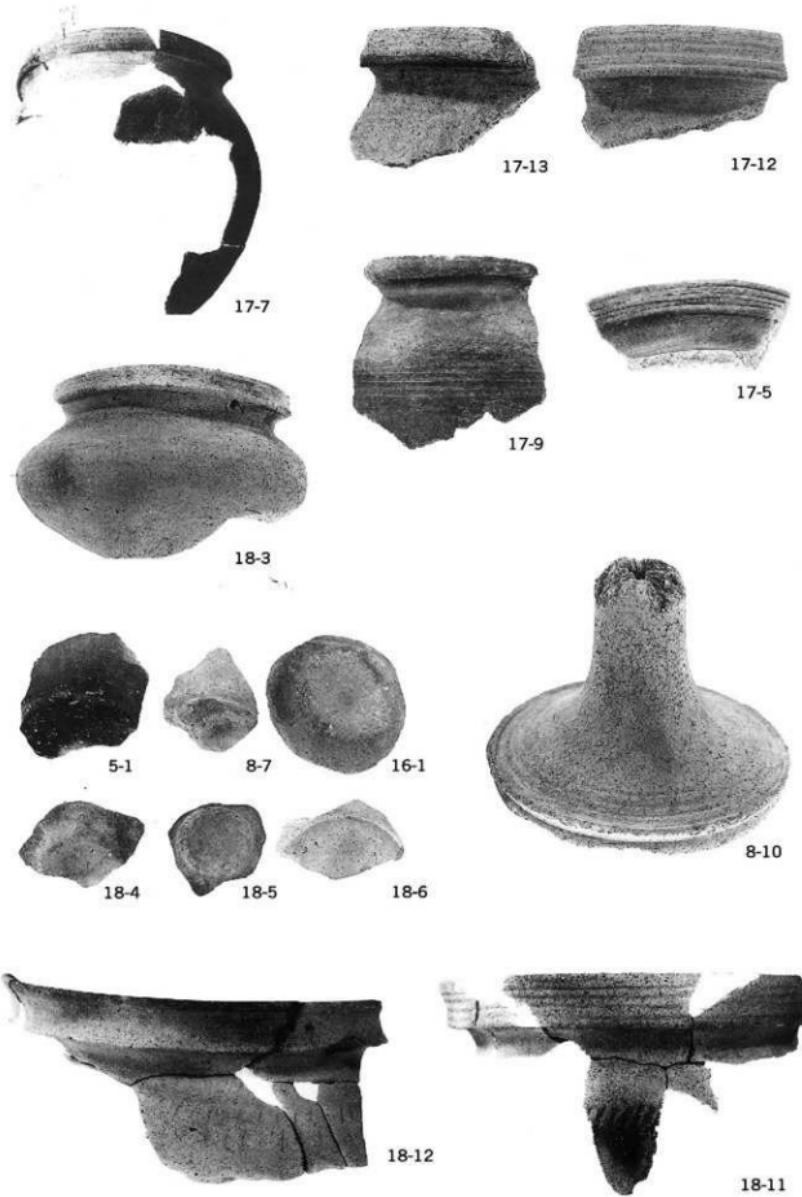
SKO 2 出土遺物



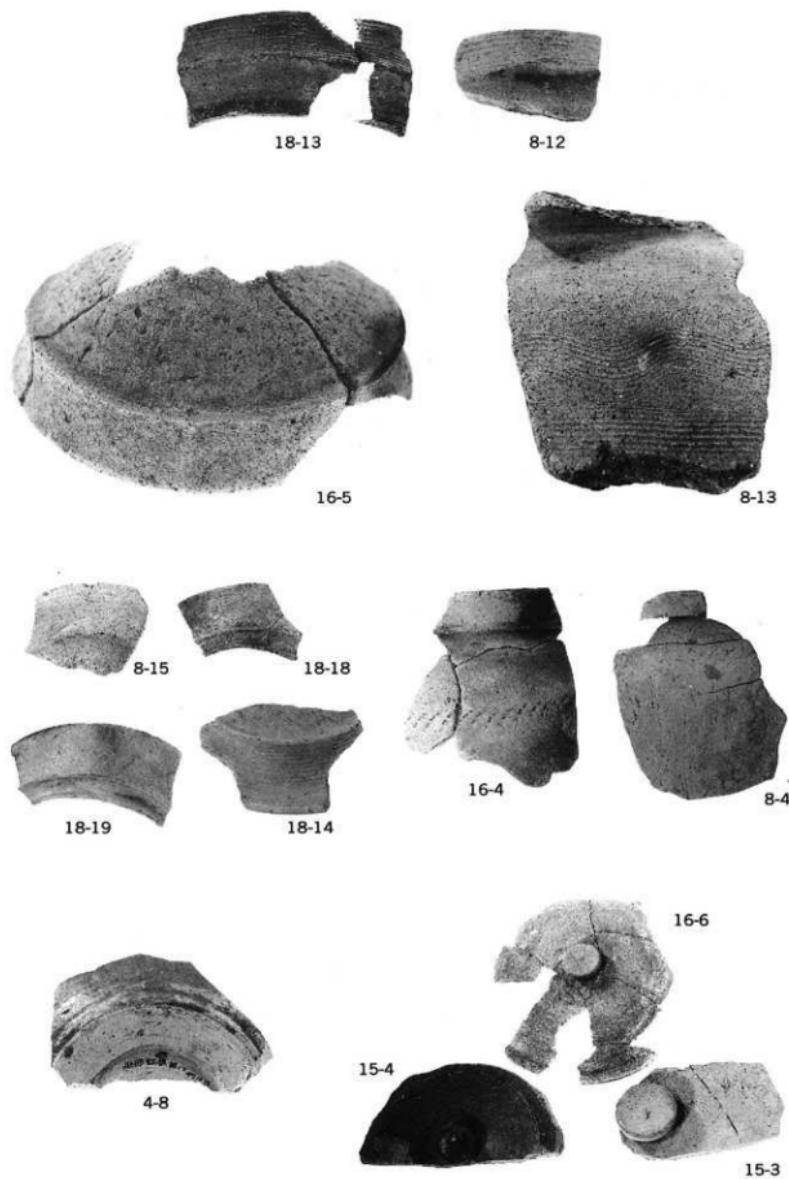
SKO 3 出土遺物



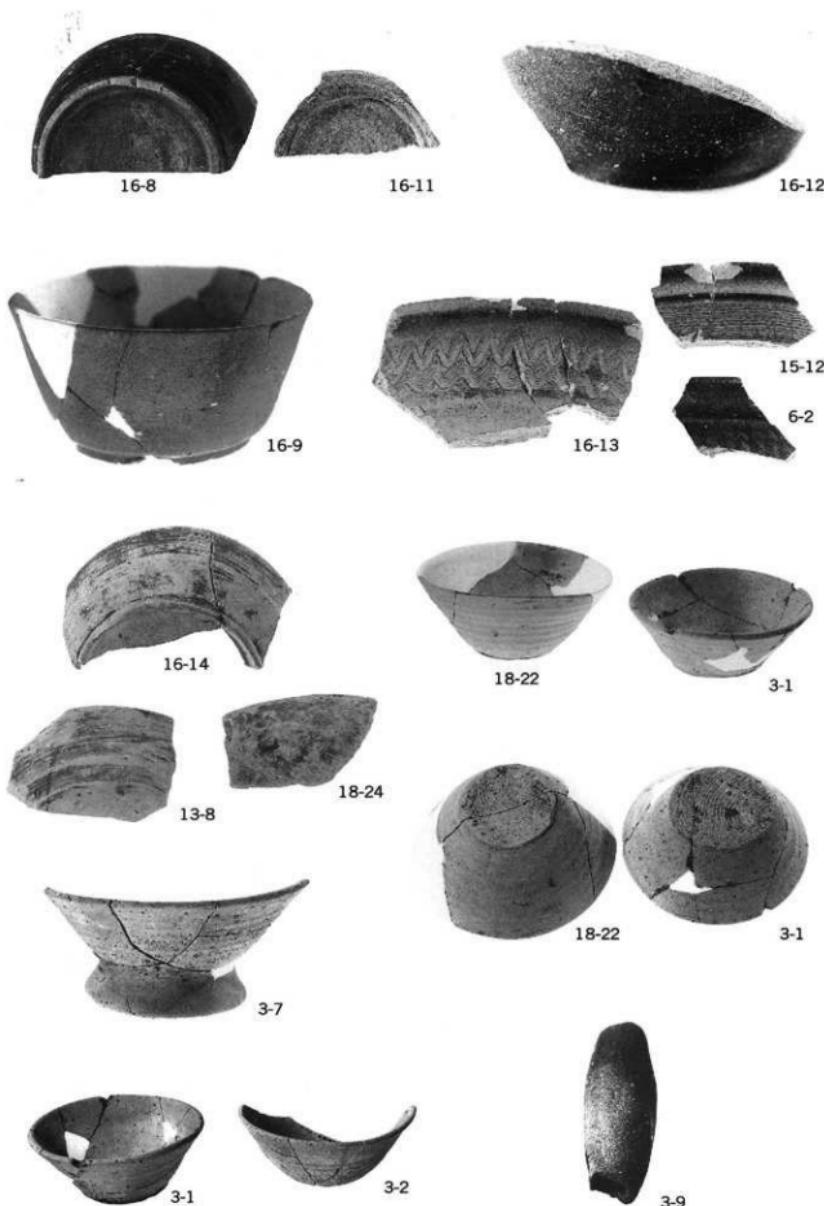
遺構外出土遺物 (1)



遺構外出土遺物 (2)



遺構外出土遺物 (3)



遺構外出土遺物 (4)

藤ヶ森遺跡の調査

1. 位置と環境

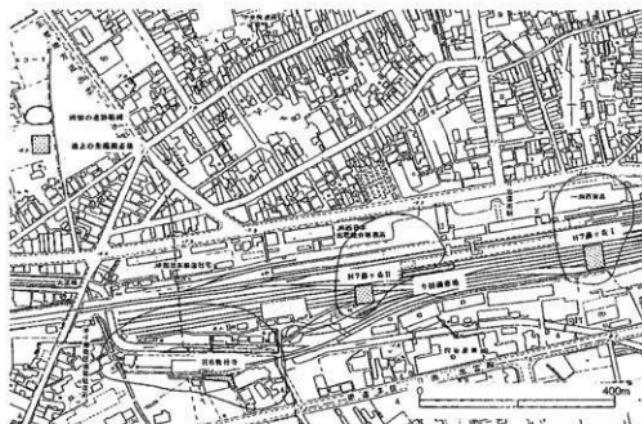
今回の発掘調査地は市街地のほぼ中心である今市町地内であり、JR出雲市駅の西側に隣接する地点である。この地点は弥生時代から近世にかけての遺跡として知られる藤ヶ森遺跡の範囲内となってい。藤ヶ森遺跡は出雲市駅を挟んでⅠ地点（東側）とⅡ地点（西側）に分かれるが、今回の調査地はⅡ地点のほぼ東端にあたるものと考えられる。

遺跡の南西約100mには弥生時代から奈良・平安時代の遺物が多く出土し、縄文時代晩期後半の土器も確認されている善行寺遺跡が存在する。また、西北西約200mの位置では、弥生時代中期末頃の木製品を大量に出土する、海上遺跡が近年新たに発見されている。

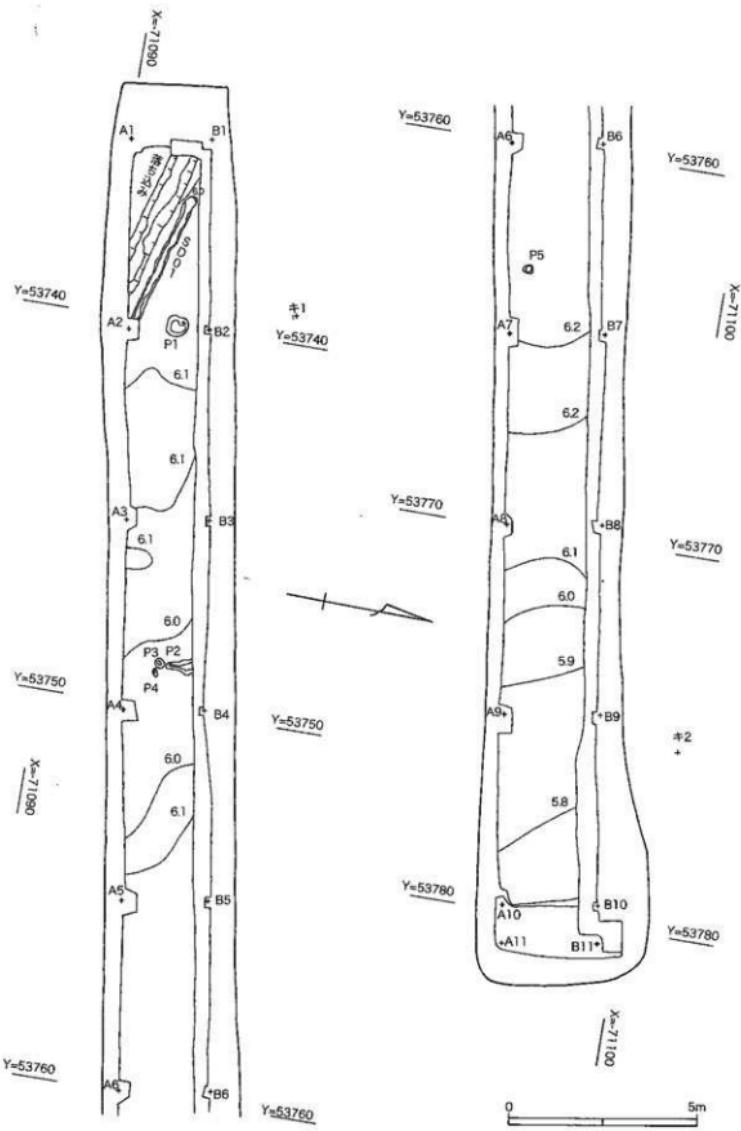
2. 調査に至る経緯

平成9年（1997）12月、出雲市駅周辺整備課より駅周辺地区土地区画整理事業地内における第10号区画道路他の埋蔵文化財調査についての依頼を受けた。当該地は周知の遺跡である藤ヶ森遺跡の隣接地であり、遺跡の範囲を確認するため、翌年8月、6カ所のトレンチを設け、試掘調査を実施した。その結果2カ所のトレンチにおいて遺物が発見されたため、市教委と駅周辺整備課で協議を重ね、発掘調査を実施することで合意した。

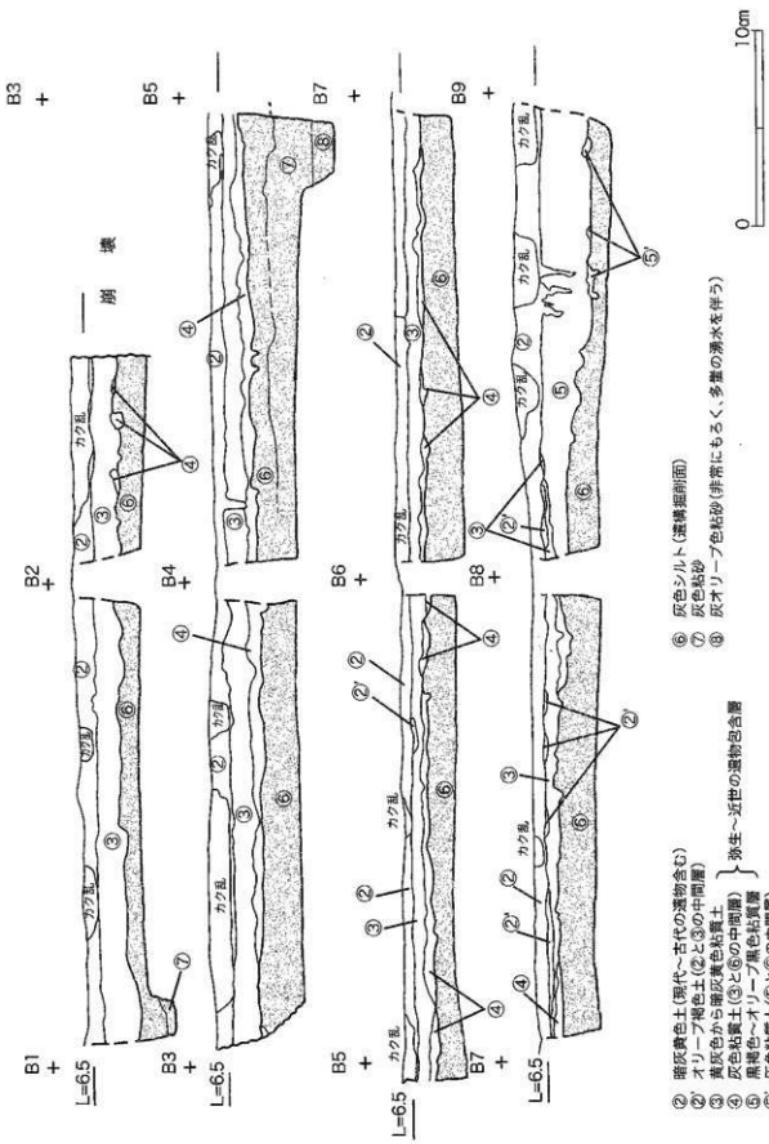
調査は、試掘調査によって遺物の散布が確認された区間を対象に平成11年8月2日に着手し、同年9月16日に終了した。



第1図 調査区の位置と周辺の遺跡



第2図 滲漏配置図



第3図 Bライン・主層断面図

3. 調査の概要

調査は重機によって造成土を撤去し、その後手掘りによって徐々に掘削しながら調査を進めた。調査面積は南北約4m、東西約50mの約200m²である。

層序は、基本的に上から造成土、暗灰黄色土、黄灰色粘質土、灰色シルト層と続き、黄灰色粘質土が遺物包含層、灰色シルト層上面が遺構面である。

遺構面からはピット状遺構5、溝状遺構1、落ち込み1を検出した。包含層は弥生時代中期から近世までの遺物が混在して出土し、遺構面以

下では遺構、遺物ともに全く確認されなかつた。遺構面の標高は約6.2mであり、調査区の東側に向かって徐々に低くなっている。

遺構と遺物

S D O 1

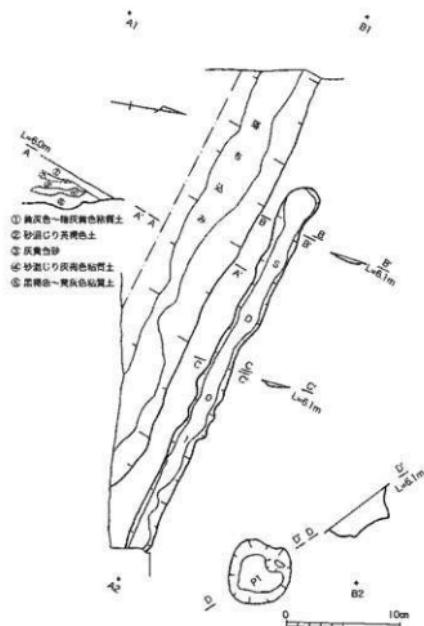
幅約20cm、長さ3.5m以上、深さ約5cmを測る浅い溝状の遺構である。調査区南西端の落ち込みに沿うような形で東南東—西北西方向に伸びており、東南東側は調査区外に向かって続いている。遺物は丹塗り土師器細片が出土している。

ピット

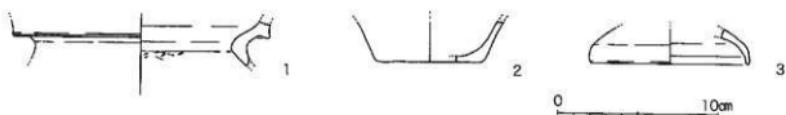
5基確認されたピット状遺構のうち、P1が最も大きく、直径約60cm、深さ約20cmを測る。その他のピットはいずれも深さ5cm以下の不明瞭なものである。遺物はP1で若干の須恵器、土師器、陶磁器の細片が出土している。

落ち込み

調査区南西端で検出した落ち込みである。この落ち込み埋土中には大量の湧き水を伴う砂層があり、調査区崩壊の恐れがあったため、底面まで掘ることは断念せざるを得なかった。深さは50cm以上を測り、斜面途中で一部狭い平坦面が形成されている。旧河道の肩部分である可能性が考えられる。



第4図 1Gr 遺構実測図



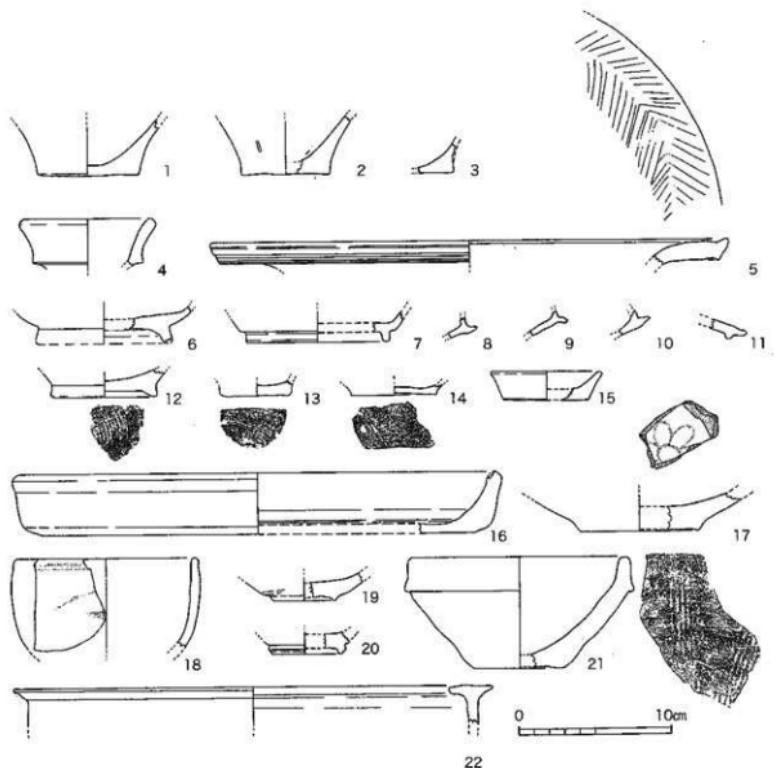
第5図 落込み 出土遺物実測図

遺物は1層（砂層上粘土層）で弥生土器片が、2～4層（砂層）で須恵器、陶磁器細片が、5層（砂層下粘土層）で須恵器、弥生土器片が出土している。第5図1は1層出土土器、2～3は5層出土土器である。1～2は弥生土器片で、1が甕頸部、2が甕底部の破片である。いずれも風化著しいが、1では複合口縁の外面に沈線が、体部内面にケズリがわずかに確認される。3は須恵器壺蓋の破片である。

包含層遺物

包含層からは、少量ながら弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器などが混在した状態で出土している。第6図1～5は弥生土器である。1～3は甕底部で、2ではわずかに外面ミガキ、内面ケズリの痕跡が確認される。4は小型の甕口縁部である。小片のため復元径はやや不明確で、調整等も風化のため不明である。5は広口壺の口縁部で、端部が上下に拡張するものである。端部の拡張部には3条の凹線が施され、口縁上面には羽状文が施される。

6～11は須恵器である。6～7は高台付きの壺である。7は底部と壺部の境に明瞭な稜を伴った立



第6図 遺構外遺物実測図

ち上がりが見られる。8～11は蓋杯である。8～10が杯受け部の破片で、11はかえりの付いた蓋端部の破片である。

12～16は土師器、土師質土器である。12～14は杯底部である。12は高台が付き、いずれの個体でもわずかに糸切り痕が残る。15は灯明皿である。16は焰烙である。

17～22は陶磁器である。17は白磁で、底部外縁部以外は淡緑色の釉がかかり、底部内面には染付により花が描かれている。18は陶胎染付の碗で、淡緑色の釉がかかり、外面には植物かと思われる文様と口縁部付近に2条の線が描かれている。19～20は高台付陶器の底部で、19は蛇の目釉剥ぎ状に釉が底部内面にかかり、20では内面全体と外面の一部に釉がかかる。21は陶器擂り鉢で、内面に6条1単位の条線が放射状に施される。赤色の胎土で、無釉である。22は陶器甕で、口縁端部がT字状を呈する。赤色の胎土で、端部上面の内縁部以外は暗赤褐色の釉がかかる。

4. 小 結

藤ヶ森遺跡は弥生時代前期末から、近世にかけての断続的な集落として知られている遺跡である。今回の調査地は藤ヶ森遺跡II地点の東端付近にあたり、確認された遺構、遺物はともに少量であった。

出土した遺物の時期は弥生時代中期から後期と古墳時代後期～近世であり、弥生時代末から古墳時代中期までの遺物は確認されていない。このような空白期の存在は過去の藤ヶ森遺跡の調査においても同様な状況が確認されている。

遺構の時期は大部分が不明であるが、SD01については奈良～平安時代以降、P1については中世以降のものと考えられる。全体に当時の遺構面より削平されており、遺構内からの遺物も細片がほとんどであるため、それぞれの遺構の性格についても不明である。

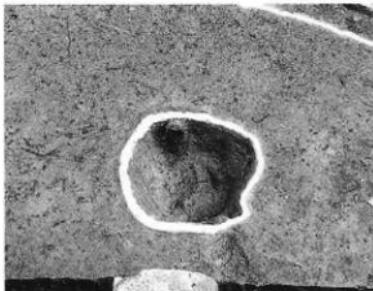
調査区南西端で確認された落ち込みは、中世以前の旧河道である可能性が考えられ、藤ヶ森II地点の中心部と今回の調査地との間にこうした地形の存在が確認されたことは当時の遺跡の立地を考える上で貴重な成果といえる。

参考文献

- 『JR山陰本線・私鉄一畠電鉄連続立体交差事業地内 藤ヶ森遺跡(Ⅰ地点・Ⅱ地点)発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1998年
『善行寺遺跡』『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集』出雲市教育委員会 1997年



完掘状況（西より）



P 1 (北より)



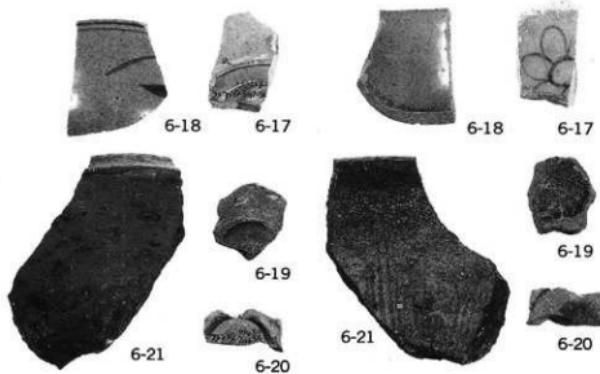
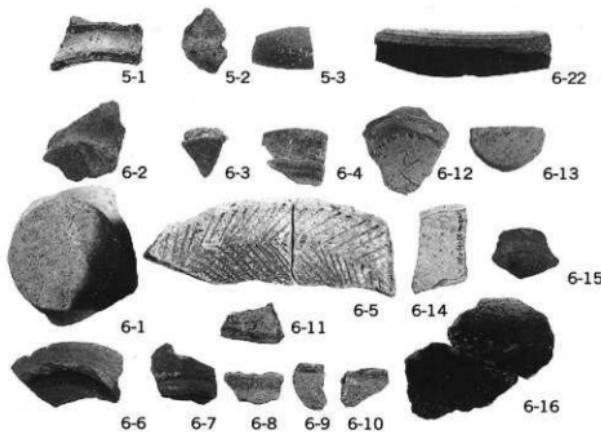
P 2・P 3・P 4 (北より)



SDO1・落ち込み
(南東より)



P 5 (南より)



出土遺物

荻籽II遺跡出土土器

1. 位置と環境

荻籽II遺跡は、出雲市荻籽町地内において平成4年度に発見された遺跡で、五輪塔などが散布する中世の遺跡として知られている。遺跡は出雲平野の中央部、斐伊川西岸の水田地となっている旧自然堤防上に立地し、中国青磁の優品（国重要文化財）出土土地として有名な荻籽古墓周辺が遺跡の範囲である。

南東には荻籽I遺跡が、西には稻岡遺跡、高岡遺跡が旧自然堤防上に並んで立地している。これらの周辺遺跡の実態については未だ不明瞭な点が多いが、稻岡遺跡、高岡遺跡については弥生時代後期以降に営まれた集落跡、荻籽I遺跡については中世の五輪塔等の散布地として把握されている。ま



た、近年稻岡遺跡南方で奈良時代以降の水田跡も確認されている。これは高岡遺跡の一部として報告されているが、稻岡遺跡に付随するものと考えてよいであろう。

今回報告する土器資料は、荻舟II遺跡のほぼ中央部にあたる地点で採集されたものである。

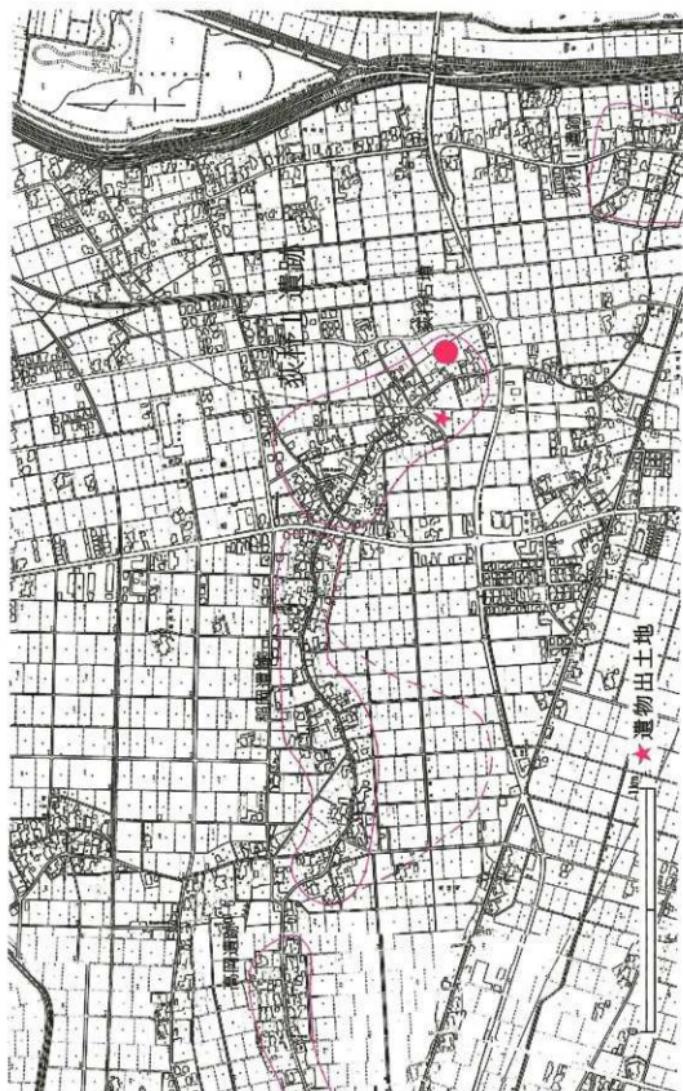


図2 第2回 考古遺跡と周辺の位置

2. 遺物発見の経緯

平成9年（1997）7月、地元住民の方より出雲市萩杵町地内において工事掘削排土から多量の土器を発見したとの連絡を受けた。連絡された方から詳しい場所を聞き、現地を視察したところ、土師器、弥生土器が掘削土中から露出しており、掘削地も周知の遺跡である萩杵II遺跡の範囲内であったため、早速用地管理者から事情を聴取することとした。

用地管理者の方によると、遺跡範囲と知らずに掘削を行ったもので、掘削は3m四方、深さ約3.8mの範囲で計4カ所を掘削したことであった。掘削排土については現地に仮置きされているもののみであり、他所への運搬は行われていなかった。その後再度現地視察を行った結果、遺物が認められるのは掘削地のうち1カ所のみであることが確認された。

用地管理者との協議の結果、遺跡範囲内の掘削工事は以後教育委員会の確認無く行わないこととし、現地掘削排土中遺物の採集作業を緊急で行うことで合意した。

作業は同年7月14日に実施した。採集方法は手作業によって排土を崩し、遺物の確認を行った。掘削箇所はすでに客土によって埋められていたため、層位の確認はできなかったが、遺物を包含する土質は灰色粘質土が中心であり、この土の大部分が排土表層付近に集中していたことが確認された。この灰色粘質土は掘削深の下半部に堆積していたものであろう。

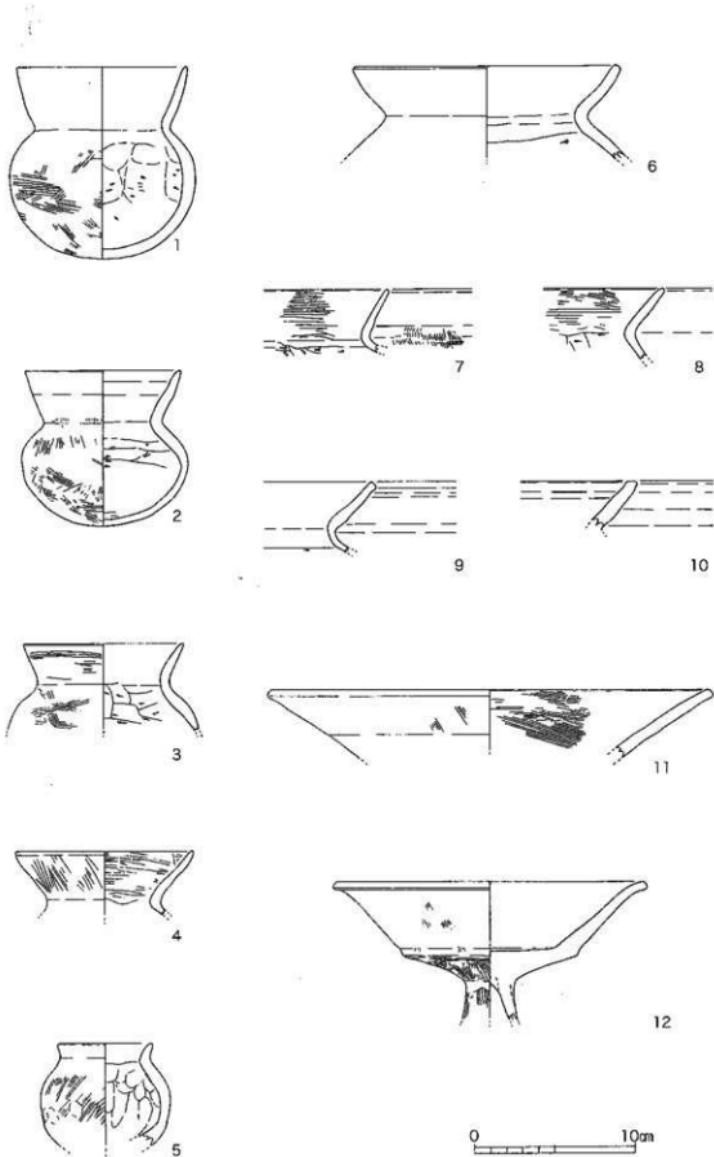
3. 採集遺物

採集された土器はコンテナ2箱分である。その大部分は小片であったが、中には完形近くまで接合できた個体もある。

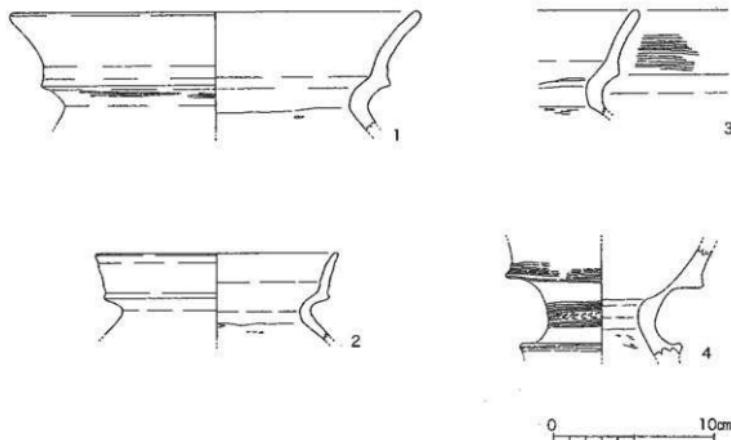
第3、4図は採集遺物実測図である。

第3図は古墳時代中期前半を中心とした時期の遺物と推定されるものである。

第3図1～10は単純口縁の土師器壺、甕である。1～2は全形が把握される直口壺で、口縁は若干内湾して立ち上がり、球形の体部を持つ。体部外面にハケメが、内面にケズリが施される。2では口縁中程の内外面に緩やかな稜が認められ、体部も1に比べやや扁平な形状を呈する。3は直口壺の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部はまっすぐ逆ハの字状に開き、やや短く立ち上がる。体部外面にハケメが、内面にケズリが施される。また、口縁外縁にも一部横方向のハケメが残る。4は直口壺の口縁部から頸部にかけての破片である。全体に歪みが大きいため、図上で復元した傾きについては不安が残る。口縁は若干内湾して立ち上がる。口縁部外面に縦方向のハケメが、内面に横方向のハケメが残る。また、頸部以下内面ではケズリが施される。5は短頸甕の口縁部から体部中程にかけての破片である。口縁部は短く逆ハの字状に開き、球形の胴部を持つ。体部外面にハケメが、内面にはナデ、オサエが施される。体部外面のハケメ上にも一部指の跡が残り、全体にやや粗雑なつくりである。6は甕の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁は内湾して立ち上がる。体部内面にはケズリが施される。7～10は口縁部小片である。7、8はまっすぐ逆ハの字状に立ち上がる薄手のもので、内面にハケメが施される。9、10はやや内湾して立ち上がる厚手のもので、端部に面を持つ。



第3図 採集遺物実測図(1)



第4図 採集遺物実測図(2)

第3図11は器種不明品である。逆ハの字状に広がり、端部に面を持つ。内面には細かいハケメが施される。

第3図12は土師器高壺の口縁部から脚接合部にかけての破片である。壺部は底と口縁の境に稜線を伴う明瞭な段を持ち、脚部と壺部の接合には内面から粘土を充填する技法が使用されている。口縁は端部付近で外方に屈曲し、端部に面をつくる。壺部以下外面にはハケメが施されている。

第4図は、弥生時代後期後半から終末期頃にかけての遺物と推定されるものである。

第4図1～3は弥生土器複合口縁の壺、壺口縁部である。1は復元口径26cmの大型品で、口縁が外反して立ち上がり、稜部が水平方向に突出するものである。内外面にはナデが施され、頸部外面には平行線状の工具痕が一部残り、体部内面にはケズリが施される。2は薄手のもので、口縁の湾曲が少なく、稜が水平方向に突出するものである。内外面ナデ、体部内面にはケズリが施される。3は厚手で、口縁がやや外湾し、稜部の突出が明瞭でないものである。口縁外面には貝殻復線による13条の平行沈線が施され、頸部内面にはミガキが、体部内面にはケズリが施される。

第4図4は弥生土器鼓形器台筒部付近の破片である。筒部には羽状刺突文とその上下に2～3条の平行沈線が施される。稜部付近の受け部、脚部外面には平行沈線が明瞭に残る。また、受け部内面には丁寧なミガキが、脚部内面にはケズリが施される。

4. 小 結

今回採集した資料は弥生時代後期から終末期にかけての土器と古墳時代中期前半の上器である。これまで荻杵II遺跡は中世古墓等分布地として遺跡の性格が把握されていたのみであり、それ以前の時期の遺物資料の確認は今回が初めてである。

これによって、荻杵II遺跡の性格は中世遺跡としてのみでなく、弥生時代後期以降の遺物散布地としての性格も持つことが判明した。残念ながら今回の資料は発掘調査に伴ったものではないので、包含層下の遺構の状況は不明であるが、約10m²の掘削地から相当量の弥生時代後期～終末期と古墳時代中期前半の土器が出土していることから、当該期に営まれた集落跡としての性格が考えられる。

特に、古墳時代中期の集落が出雲平野の中心部で確認された例は少なく、当該期の出雲平野における人々の居住域を考えるにあたって、荻杵II遺跡出土土器は貴重な資料といえよう。

参考文献

- 『出雲市遺跡地図』 出雲市教育委員会 1993年
- 『出雲上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財発掘調査報告書』 島根県教育委員会ほか 1980年
- 『高岡遺跡』 山陰教育委員会 2000年
- 松山智弘 「出雲における古墳時代前半期の上器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌 第8集』 島根考古学会 1991年
- 松本岩雄ほか編 『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』 木耳社 1992年



遺物出土地近景



遺物発見状況



作業状況



3-1



3-2



3-12



4-4



3-3



3-4



3-7



3-8



3-5



3-6



3-9



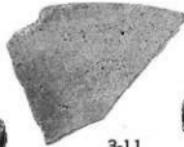
3-10



4-1



4-3



3-11



4-2

出土遺物

報告書抄録

フリガナ	イズモシマイゾウブンカザイハックツチョウサホウコクショ 11				
書名	出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集				
編著者名	藤永照隆　坂本豊治				
発行機関	出雲市教育委員会				
所在地	〒693-8531 島根県出雲市今市町109番地1				
発行年月日	平成13年3月31日				
所収遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	
ナカノ《家》イセキ 中野美保遺跡	シマネケン イズモシ ナカノチャウミホ 島根県出雲市中野町美保	19991213 — 20000131	115m ²	出雲市北部第二土地区画整理事業	
ブジガキリ イセキ 藤ヶ森遺跡	シマネケン イズモシ イマイナチャウ 島根県出雲市今市町	19990802 — 19990916	200m ²	出雲市駅周辺地区土地区画整理事業	
オギトツ《2》イセキ 荻杼Ⅱ遺跡	シマネケン イズモシ オギトツチャウ 島根県出雲市荻杼町	19970714	(9m ²)	民間開発に伴う工事中発見	
収容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野美保遺跡	集落遺跡	弥生時代 8~9世紀 11世紀	土坑、井戸	弥生土器、須恵器、 土師器、陶磁器	
藤ヶ森遺跡	集落遺跡	弥生時代中・後期 古墳時代後期~近世	ピット、溝状遺構、 地形の落ち込み	弥生土器、須恵器、 土師器、陶磁器	
荻杼Ⅱ遺跡	散布地	弥生時代後期 古墳時代中期		弥生土器、土師器	

出雲市埋蔵文化財発掘報告書 第11集

中野美保遺跡・藤ヶ森遺跡・荻杵II遺跡

平成13年3月31日発行

編集・発行 出雲市教育委員会
出雲市今市町109番地1
印刷・製本 株式会社 武永印刷
出雲市江田町208-1